

---

# 東方変態医者

素晴らしき井坂深紅郎を深く紅く愛そうの会001

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方変態医者

### 【Nコード】

N0453M

### 【作者名】

素晴らしき井坂深紅郎を深く紅く愛そうの会001

### 【あらすじ】

ある年、晴天の日、人類は医学の要にもなるであろう人物を失った、その名は『井坂深紅郎』彼は、人類史上、もっとも多くの人間の命を実験素材として利用し、それに比例する数のガイアメモリを己に使用してきた人物でもある、この物語はそんな彼が死後にどのような生活を送ったかの物語 下記の物に嫌悪感を覚えるならば読まない事をお勧めします 格好いい井坂深紅郎 アブノーマルな井坂深紅郎 シリアス（笑）な井坂深紅郎 天然な井坂深紅郎 キヤラ崩壊 やめてくれないか！俺の嫁をそんな奴に好きにさせるのは！

2 逆に下記に当てはまる人には読むことをお勧めします 井坂先生 Love 井坂先生は知らないけど興味あるよ！ キャラ崩壊？感動的だな、だが無意味だ

3 尚、この話を閲覧した事により嘔吐、頭痛、などの症状が起きたとして、私は一切の責任を負いません、全ては乾巧という奴の作業なんだ

以上の事を踏まえた上で閲覧してください

## 服用時の注意（前書き）

初めまして、素晴らしい井坂深紅郎を深く紅く愛そうの会001と申します、

略してイサゼロです。

今回は主人公紹介＋注意となっております

## 服用時の注意

### 服用時の注意

閲覧時に気分が悪くなったり、頭痛がした場合は、すぐに病院で診断を受けてください（推奨病院名：井坂医院 スマートブレイン医療機関）

ちなみに、頭痛がし、頭の中から奇妙な音がする場合は頭の中にダインマイトがある可能性があります、大人しくマンホールに身投げするか、ジユラ何とか星人の飛行船に突っ込んでください

尚、同居人が「泉君、たなびたいことがあるんだ、ちよつと。」や「さあ、早くチャージング棒を見せてくれ。」や「だから人目に付かないここまで来たんじゃないか。一回きり見せてくれれば、それで僕は満足するんだ。お願いだから・・・ネネ、いいだろう？」や「僕、絶対しゃぶらないよ。だから・・・ねえ、見せてくれるかい？」などと言い出した場合はおそらくL5に達しています、焼いて処分してください

## 本編主人公紹介

井坂深紅郎イサカシンクロウ性別 /

歳 / ? 中年半ば

照井竜（本編には関係ありません）が家族の仇として追っていた真犯人。

井坂は 1ドールパント専門の医者という裏の顔を持つ内科医である。通常1ユーザー1メモリという 2ガイアメモリの法則を無視した

複数のガイアメモリの挿入によって日々肉体を強化している怪物で、その胸には自らの身体を使ってガイアメモリの効果を試験した実験投与のための 3 生体コネクタ痕が無数に刻まれている。

それによって強化された肉体の変質によって、異常なまでの食欲をもつ大食漢でもある。

4 ガイアドライバー、 5 ダブルドライバーなどのガイアメモリの毒素を分解するドライバーはガイアメモリの本来もつ能力をスポイルするものとして、その存在を否定する 6 アンチドライバー主義者である。よって、ガイアメモリは直挿しすることに意味があるものとして、ドライバー使用者を「7 ドライバー使い」と呼び、卑下している。

1 ドーパント 2 のガイアメモリを使用し、超人的な能力を得た元人間の怪物、メモリをブレイクする事によって通常の人間へ戻る他、自分の意思で超人体から人間体に変換することができるが、超人体への変身はガイアメモリを使用しないと不可能

2 ガイアメモリ USB のような形のドーパントへの変身アイテム、中には『地球の記憶』が記録されている

3 生命コネクタ痕 PC に例えれば所謂コネクタ（そのままである）

4 ガイアドライバー 仮面ライダー W 本編で登場する、幹部とも呼ばれる園崎家の人間が使うドライバーで、ガイアメモリの毒素を抜く効果がある

5 ダブルドライバー 仮面ライダー W の変身アイテム以上（若干投げやり気味に）

6 アンチドライバー主義 今の所井坂先生のみ

7 ドライバー使い 仮面ライダー＋幹部の人達

ウェザー・ドーパント 【WEATHER・DOPANT】

身長 249cm

体重 115kg

特色/力：強烈な日照、豪雨、落雷、竜巻、絶対零度の冷氣など、あらゆる気象を増幅して技に転用する。

腰にマウントされた万能チェイン武器<ウェザーマイン>を使用し、強烈な物理的攻撃も可能。

説明

井坂深紅郎がガイアメモリ<WEATHER>を使用して変身した姿。あらゆる気象を操り、通常のドーパントでは考えられない多彩な攻撃能力を持つ。<WEATHER>のメモリは園咲家が持つ8ゴルドのガイアメモリに匹敵する 9上位メモリであり、メモリケースのカラーも一般流通されたガイアメモリにはないシルバーである。ウェザー・ドーパントの攻撃能力は異常なまでに高く、10ダブルと 11アクセル、二人の 12仮面ライダーが同時に攻撃を放つても 13通用しないほどである。

8 ゴルドのガイアメモリ 成金メモリ

9 上位メモリ 上位だが素材が違う訳では無い

10 ダブル 仮面ライダーW本編にての主人公、二人の男が合体し、変身する、通称：半分こ怪人

11 アクセル 中二的な決め台詞で子供達を引き付ける程度の能

力、だが質問されれば『俺に質問するなあ!!』と叫び暴れる、しかし、井坂先生を殺害し、幾分か落ち着いたのか『俺に…質問しないでくれるかな?』と、優しく語りかけたが、結局答えない

12 仮面ライダー マスク乗り手（提供：エキサイト先生）

13 通用しないほどである だが危なかった、これは公式サイト（硬式 彩都）の能力、『敵の設定を大げさにする程度の能力』の効果である



## 服用時の注意（後書き）

申し訳ありません、このような駄作で

：いえ、別にふざけていた訳ではありません

すこし、アンサイクロ何とかがつぽくしたくなっただけです  
言わば、反逆です

（訳：次から真面目だと思えますから許して！）

Wよ再び／変わりやすい山の天候（前書き）

キャーイツサカサーン

コッチムイデー

## Wよ再び／変わりやすい山の天候

ある年、人類は世界一の名医を失う、その名は『井坂深紅郎』  
彼は、人類の進化に貢献し、偉大な成果を残した、しかし、その為  
に「王の判決を言い渡す…死だ！」となり、この世を去った…  
この物語は…そんな彼の死後談である

東方 変態医者

「いいんですか？そんな約束をして…僅か1%も勝てる確立が無い  
と言つのに？」

「全て…振り切るぜ…！！変…身！」

「確かに速い…しかし、使う奴が虫ケラでは…」

「9・8秒、それがお前の絶望までのタイムだ」

「私への憎しみが…お前をここまで強くしたと言つのか…！？」

「ぐあつ！？ぐあああ！？」

「メモリの過剰使用のツケが回ったんだ…」

「こ…これで終わったと思うなよ…お前等の運命も仕組まれていた  
んだ。シュラウドと言う女に！」

「先に…！地獄で待つてるぞおおおお！！がああああ…！！」

彼の<sup>まぶた</sup>瞼の裏には死ぬ前までの光景が染み付いていた

彼は疑問に思った、何故、意識があるのかと

彼は疑問に思った、何故、背中に地面の温もりを感じるのかと  
そして一つの答えに辿り着いた

（生きて…いる…？）

彼がそう思い、意識が覚醒し始めると、同時に声も聞こえてきた

「…ますか？」

意識が朦朧としているのではつきりとは聞こえないが、彼は声が聞こえた事に驚いた

「生きてますか？だめだ、返事がない、ただの屍のようだ……」

その言葉を聴いた彼は、死体扱いされて、何処かに埋められたら全てが終わるので、とりあえずゆつくりと体を起こす

「…くう、…まだ生きてますよ、残念ながら」

ぼんやりする頭を横に振りながら、声の主の顔を探す

「何だ…生きてたんですか…久しぶりの特ダネかと思ったんですけど…私の期待を返してください、三倍にして」

そう言われると、彼は何故か自分が悪い様な気がしてきた、実際は全く悪くないのだが…

「え？あ、いやー失礼？」

戸惑いながらも彼は声の主を見つけ、顔を確認する

その顔は、まだ幼さを残すが、どこか、厳格な会社員のような雰囲気漂わせる顔立ちだった…

彼は、このような顔立ちの者を知っている

「…マスゴミ？」

「ちよ、人の顔を見て第一声がマスゴミ？ってどんな教育受けてるんですか？親の顔が見たいですね」

「いや、失礼、さすがにマスゴミは言い過ぎましたね…所で、ここは何処でしょうか…？」

彼は素直に疑問に思った事を彼女に聞いた

「はあ、なんて在り来たりな…せめて『知らない青空だ…』とか言えないんですか？」

青空は何処で見ても一緒だろう、と彼は正直に思う、いや、山で見る青空と都会で見る青空は違うかもしれないが…

「ここは『妖怪の山』です、特に用が無いのなら、さっさと下山してください、迷惑です」

「妖怪…？あれですか、心霊スポットとかですか？そうか…その力

メラ…実はフェイタルフレームとかできるんじゃないか」

「馬鹿ですか？幽霊は撮影してもダメージを与えられませんよ？しかも、ここは本当に妖怪が出ますよ？河童とか天狗とか」

彼女、よくよく見れば中学生にも見えなくはない、だから彼は信じられなかった、彼女の言う事が…

「ハハハハ…それは興味深いですね…診察してみたいですね」

「む、信じてませんね、その顔は…まあ、いいです、勝手に食われるなり実験台になるなりして死んで下さい、…それより…あなたの手にこんな物が握られていたんですけど、何ですか？コレ」

そういいながら、彼女の手には銀色のUSBメモリのような物があった

「私の直感が告げるには超特ダネっばいんですけど、コレ…なんでしたっけ？USDKメモリ？」

「さて、落ち着いてそのメモリをこちらに返しなさい、今なら私は怒りません」

そういいながら、彼はメモリに手を伸ばす、しかし、彼女は軽く後ろに下がり彼の手を避ける、そして意地悪い笑みを浮かべ、メモリを左右に振る

「そんなに返して欲しいって事は…相当珍しい物なんですね？ふふふ…話すまで返しません」

普通の人間なら喋っただろう、しかし…彼、井坂深紅郎にとって…それは…命よりも大切な物だった

「返してください」

殺してでも、奪い取る」

井坂は即座に飛び上がり、人間とは思えないスピードとフットワークで彼女を翻弄し、飛び掛り、メモリの奪い合いに入る

「そのメモリ…私に返しなさい！」

「は、速っ！ちょ、やめてくださいって！返しますから！」

だが、半分以上発狂した、彼の耳にはその声が届かなかった  
そして、そこからさらに悲劇が起こる

「んー？こつちから声がしたような…」

横に広がる森の奥から一人の少女が姿を現した

その右手には剣

左手には盾

（おかしい…現代社会的に考えても…銃社会的に考えても…何故剣と盾？それに…）

井坂が一番目を引かれた場所…それは

「何故…何故獣耳＋尻尾？…コスプレイヤーの溜り場ですか…？」

「む！侵入者はっ……………何やってんだ下衆があああああ！？」

突然叫ばれた事により、井坂は現状を飲み込む

少女と井坂の取っ組み合いの姿勢、何処からどう見ても…井坂が少女を押し倒しているように見えるのである

「なんという…在り来たりな…いや、落ち着きなさい、これは一種の誤解ですよ」

剣を構え、戦闘姿勢に入っている少女を何とか説得させようと、井坂は声をかけるが…

「助けてもみじ桜！この人いきなり襲い掛かってきて…！」

「マスゴミがあああああ！？」

少女の演技によって中断された…いえ、もうやめましょう、この第三者視点の解説は…やり難い

全く、困りましたね…突然訳のわからない山に飛ばされるし…そして何より…

非常識人が多い！

唯一の救いは、ブレイクされたはずのウェザーがある事ぐらいですかね…

「了解です射命丸さん！今すぐ三枚下ろしにしますよ…！」  
畜生、単純な奴でしたな…なら仕方がない…

私は無理やり彼女の右手のメモリを取り返す、おお…この触れるたびに感じる…温もり…違う、これは彼女の体温じゃないか…

「仕方がありませんねえ…それより、桜君…と言ったかな、君の耳

と尻尾は本物なのかねえ…？」

先程から見るに時々耳は動くし、尻尾はブンブン動いてる、たしか…犬は興奮状態になると尻尾を振るんだったかな…

「もちろんですよ、本物じゃなきゃなんですか、こんなコスプレして町歩くんですか？馬鹿みたいですわね」

そうなると…本物の妖怪…妖怪の山…本当だったんですね…いやいや…非常識すぎる…何もかもが

「なるほど…興味深いですねえ…是非、今度ゆっくり診察させてもらいますかね」

「懇切丁寧にお断りします、そちらの射命丸さんをどうぞ」

「尻尾引き抜くわよ？」

…彼女達は…仲がいいのか…？よくわからないな、まあいい…

「では…私が勝てば二人を診察、負ければ死、それで構いませんね？」

「構いませんよ」

「いや、その取引に私が含まれる点が理解できないのですが…まあいいか…どうせ負けないだろうし…」

結局彼女達は了承する、それは私が『通常の人間』だと思っているだからだろう…

（計画通り…）

計画なんてありませんけどね

「では、行かせてもらいますよ？」

そういつて、彼女はこちらに剣を振りかざしてくる、私は軽く避け、右手のガイアメモリを強く握る

「騙して悪いが…私は人外でしてね…そう簡単には死にませんよ？」  
そういつてから右手のメモリのボタンを押す

【WEATHER!】

機会音声が鳴り響き、直後に私は右耳にメモリを挿す、すると、私は嵐を想像させる暴風に包まれ、次に雷が私の周りに落ち、私は、まるで風神を想像させる超人

【ウェザー・ドーパント】へと変身する

「変身能力…！？構いません、このまま押し通します！」

そういいながら、彼女は一直線にこちらに突っ込んでくる、それに私は1アクションしか取らない、右手を高く上げるといふ行為だそうすると、空が見る見る雷雲に包まれていき

「空が…急に暗く…やはり山は天候が変わりやすいんですかねえ…」  
射命丸、と呼ばれた少女が空を見ながら、ぼやく

「ふんっ！」

私が手を下ろすと、彼女に雷撃が直撃する、妖怪とは言っても…雷撃が直撃しては…気を失うしかないでしょう

「うわっ…雷が直撃…？まさかこれは…」

射命丸君がこちらを驚愕の眼差しで見つめてくる

「そう、私の能力ですよ、では…約束通り…診察させて頂きますかね…」

そういうながら、私は射命丸君に一步步み寄る

「ア、アンフェアですよ！！卑怯者め！！」

「安心してくださいよ、卑怯もラッキョウも大好物ですから」

ただし蟹は嫌いですけどね、あと刑事も

「わ、私にだって拒否する権利がありますよ！？抵抗しますからね？！」

「いいですよ？それなら…今度は、君が負けたら…抵抗しないでくれますかねえ？」

断れば抵抗できなくしますけどね

「…ふ、ふふふ…勝てる…私なら勝てるさ…自分に自身を持て射命丸 文！<sup>あや</sup>頑張れ頑張れ！何で諦めるんだそこで！応援してくれる人達の事も考えろよ！ネバーギブアップ！」

どうやらテンションをあげる作戦に出たようですが…

「そうか…アレですね、こういう時は…戦略的撤退が勝利ですね」

「素直に逃げるが勝ちといいなさい、逃げるが勝ちと」

どうやら、友人(?)を放って置いて逃げようとしているようです



ね…

「…う…しゃ…酷…」

「うわあ！死体がまだ喋った！（首にストレートに蹴り）」

「ごふっ…絶対来世で会ったら殺します…」

「いや、さすがに酷いだろ…それは…」

「では、私は今から頭痛で苦しむ予定なので、そろそろ行きますね」  
射命丸君は、こちらに笑顔を向けて逃げ出そうとしています…

「それなら丁度いい、私は一応医者なので、診察しましょう」

「うわあ！大変だ！今私の祖母が死にました！帰らなくては！」

そう言っただけで彼女は逃げ出そうとする、…まあ…別にいいかな…割と普通の人間かも知れませんし…

「では！桜は使い終わったら郵便受けにでも突っ込んでいてください！」

どれだけ大きいんですか、その郵便受け

しかし、彼女はここで大きなミスをした、それは…

【背中から翼を生やした】

「待てえええ！！診察させてもらいましょー！！」

「うわあ！やっぱり反応しますか！？どうか見なかった事に！」

私は彼女の言い分を無視し、彼女の上に雨を降らせる

「ちよ、こんな時に…！神は私を見放したと言っか！」

射命丸君は雨をまともに受けて、翼が重くなっただのか、スピードが一瞬下がる、私はその瞬間を逃さず、向かい風を吹かせ、こちらに射命丸君を吹き飛ばす

「これ絶対自然風じゃありませんよね！？もう嫌だああああ…」

「お帰りなさい、射命丸君…？」

「た…ただいま…えっと…」

「私は井坂深紅郎、と言います」

「あ…文です、射命丸文」

ふむ…文君ですか

「では、文君」

「は、はいっ！何でしょうか！？」

「この辺りに小屋は無いんですかねえ…？とりあえず柊君を治療しないと…本気で死ぬかも知れませんか？」

「え？あ、ああ…そうですね！一刻も早く治療しなければ！あ、そうだ、この近場に私の家がありますけど」

「じゃあ、そちらに移動しましょうか、案内頼みますよ」

とりあえずウエザーのまま柊君を担ぎ、歩き出す、さすがに人間体で少女を担ぐほどの力が残ってないんでね…

少女、医者移動中…

「あ、ここです、ここ」

そういつて案内されたのは、それなりの木製の家

「ふむ…ここなら十分でしょう…というか…」

「離して下さい！もう歩けますから！」

「自己再生の速度が異常じゃないですか…」

担いでいた柊君は必死に暴れていた

「…とりあえず中に」

そういうと、文君は快く中に入れてくれた、中は小ざっぱりとしているというか…何もないというか…

「あー私、殆ど家に居ないんで…別に寢床があれば十分なんですよね」

解説ありがとうございます

「では…診察を始めましょうか」

「…え？」

二人の顔から段々と血の気が薄れていくのがわかる、私は逃がさないために木製のドアを絶対零度で凍りつかせ、動かないようにする窓などの逃走経路になりそうな物も全て

「ンッフッフッフ…私が忘れるとでも？」

「あ…あははははははは…」

「あ……あややややや……」

私は人間体に戻り、二人に歩み寄る

「「イヤアアー……」ああああ……死にたい（椀）」

以下 いろいろな関係で描写不可能（ご想像にお任せしますが、大  
体Nice boatが浮かんでます）

「……残念ながら事後……かと思いきや……」

「いや……正直井坂先生の事勘違いしてましたね……」

「本当ですよ、血液摂取したり、瞳孔見たり、心拍数計ったり、体  
温測ったり、それだけじゃないですか……診察する、としか言っ  
ていないのに……そこまで拒否しなくても……」

「いえ……どう見ても勘違いしますって、あの言動は」

「ああ……あれは私のマッドサイエンティスト魂に火が付いただけで  
すよ、全く……」

正直、アレからは地獄だった、二人は泣き叫ぶし、椀君は注射機見  
た瞬間に泣き出すし、その上、心拍数を計る、といっただけで『変  
態』『ロリコン』全くもつと酷い……頸動脈に手を当てるだけなの  
にねえ……

心拍数〓心臓

この発想が許されるのは小学生までですよ

「……で、文君、一つ私からの純粋な願いがあります」

「あ、はい、全裸になれ以外だったら大抵の事はしますよ」

「……は？それ……いえ、何でもあります……」

「じゃあ……私をしばらく、いえ、永遠にここに泊めさせてはくれま  
せんかねえ？」

「……あー別にいいですよ、どの道家に夜と朝しか居ませんし……」

……文君は、アレなのだろうか、夜襲われるとか、考えないんですか  
ね……

「あ、変な事をすれば新聞にしてばら撒きます」

「本当にマスゴミだったんですね…」

「マスゴミ言っな！」

おっと、つい本音が

「では…ここに住ませてもらいますかね…ちなみに、私も人里に病院を建てるつもりです」

先程文君から聞いた話では…

ここは【幻想郷】という外の世界で忘れ去られた存在が集まる場所だそうだ

…私は一つの不安がある、それは…

私の【ウェザー】のガイアメモリ、これはブレイクされたはず…だが私の手元にある…つまり…

ブレイクされたガイアメモリが流通している可能性がある

ならば私は病院を建てよう、そして…今度は…

ドーパント専門の医者、というのはやめて、仮面ライダーの真似事でもして見ましようかね

どうせ…【テラー】のメモリはもう手に入りませんしね…

（フフフ…何故でしょう、地味に楽しみですなえ…昔の感覚が戻ってきたのでしょうか…？）

今、輝きの中で、私は

今までの罪を償えるかも知れない

## Wよ再び／変わりやすい山の天候（後書き）

この話は一話完結ですが、基本的に原作と同じように二本完結で行きたいと思います

Nの力は誰にも渡すな／英雄失格、同時に死（前書き）

本編に登場する人物は黒を白に変えるカリスマ弁護士とは関係ありません

## Nの力は誰にも渡すな／英雄失格、同時に死

幻想郷へ辿り着いて三日程経ちましたかね…私は人里の少し外れに『井坂医院』を建て、毎日診察をし、経営する事になりました

この三日間で気がついた事は…

？文君は壊滅的に料理ができない＋味覚が死んでいる

？文君の家に盗撮カメラ＋盗聴機…恐らく柊君が河童から譲り受けた物でしょう

？この世界には病院が少なく、大繁盛…妖怪とか神とかが多いので…あまり必要ではないのでしょうか…

？大繁盛に対して人手が少ないので過労死寸前

…この程度でしょうか…

誰か医大とか作らないんですかねえ…

…学習施設は寺小屋だけでしたね…

「……次の方どうぞ」

「悪いね、また体調が若干悪いので来たよ」

そっさいながら入ってくる男性、…

彼は北岡宗一…不治の病を患っている青年です  
きたおかそういち

「まったく…何なんだかね…どうせ無駄だと思っても勝手に足が動くんだよねえ…本当に無駄なのに」

彼は自嘲的な口調でそう言う

「仕方ありませんよ、人間なんですから、それと、出来る限り前向きに生きることをお勧めしますよ、病は気の持ちようですから」

「ははは…一応前向きに生きてるよ？この間告白もしたし…玉砕だったけどね」

ああ、自嘲的な理由はそれですか

「…ご愁傷様、まあ、病が一つ減った事ですし、少しは気楽になったでしょう？…一応薬は出してましよう、しかし忘れないでください、一番大切なのは」

そついいながら私はカルテに薬品の名前を書いていく

「なあ…先生、先生はさ、人の欲望ってどう思うよ？」

宗一君が今までの自嘲的な声とは違う、鋭い声で此方に聞き返してくる

「欲望…ですか…そうですね…欲望に溺れる事を悪いとは言いませんが…痛い目を見るでしょうねえ…」

「やっぱり先生もそう言うのか…俺は、あれだね、欲望ってのは一種の芸術品だと思うよ、人それぞれの個性があり、更には達成する形も違う」

なるほど…一理ありますねえ…まあ、私は達成する前に死にましたが  
「しかし、その痛い目を境に人生がいい方向に転ぶ事もありますよ？」

そう、私のように

「いい方向ねえ……ああ、そろそろ時間だ、悪いね、先生、こんなどうせ死ぬ人間の相手なんかしてくれて」

「だから、前向きに考えると…まあ、いいです」

「ははは…ごめんごめん…んじゃ、また具合悪くなったら来るよ」

…しばらく時間が経ち、そろそろ家に帰ろうとした時…

私は後ろから威圧感、というか、何かを感じた

「…出てきたらどうですか？そこに居るんでしょう、紅魔館のお嬢さん？」

私は文君から要注意人物（？）の話を聞かされた

…紅魔館…吸血鬼の住む館

門番…は空気だそうですね…時を操るメイド長、運命を操る永遠に幼き紅い月…そして、ありとあらゆる物を破壊する悪魔の妹…

正直いつか乗り込もうかとは思っていましたが…まさか向こうから来るとはね…

「今日の診察の時間は終わりましたよ、また明日来て下さい」

「……仕方が無いじゃない…日中は出歩けないもの…」



そういいながら、後ろに姿を現したのは、まだ十にも満たない少女、しかし、背中には自分より大きい翼があり、シルエットだけ見れば、かなり大きく見えるのだろう

病的なほど肌は色白く、赤い眼がより一層目立っている、薄い青色の髪も含めると、まるで一つの芸術品のようだ…

ああ…診察したい…

「…どんな御用ですか、あなたが人間の病院に来るなんて」

「紅魔館に妖怪が襲い掛かってきたのよ、それで、そいつが『井坂先生の言うとおりだ』って言ってね、井坂、という名前を調べた結果、あなたに辿り着いたのよ」

「…しかし…貴女が此処に来る理由にはなりませんよ、それは」

並大抵の妖怪ならば紅魔館のメンバーでは軽く倒せると思うんですがねえ…

「…異常に強いよ、アイツ…全く歯が立たなかったわ…で、今は咲夜と美鈴が応戦してるけど…長くは持たないわね」

「…それで、私に対処法を聞きに来た、という事ですかね？それならば残念ながら…そんな妖怪は私は知りませんよ」

その言葉を聞き、彼女は鋭い視線を此方に向けてくる

「白々しいにも程があるわね、言わないなら…言う気にさせてもいいのよ？」

その直後、彼女は右手に紅い閃光で出来た槍の様な物を持つ

「怖い眼だな…はあ、本当に知らないのですがね…特徴とかあれば教えてください、思い出すかもしれませんね」

「特徴が無いのが特徴よ」

「それ、納得できるようで矛盾してますよね？特徴あるじゃないですか」

「冗談よ、確か…体が青くて…奇妙な線が体中に走っていて…あと、オレンジ色のマフラーをしていて…右手に妙な剣を持っていたわね…」

…？私の知識にある妖怪にそのような妖怪は居ない…

しかし…私の知る【ドーパント】には全てが当てはまる物がある

「N A Z C A…」

「ナスカ…？何よ、それ」

「え、ああ、いえ…失礼、まさか…本当にメモリがこの世界に送り込まれているとは…しかし、ナスカは冴子君が持っていたはず…彼女も…死んでしまったのか…」

私は思ったより冷静な自分に驚いた、熱も冷めた、という事ですかね…

「だから、ナスカって何よ？」

「…ナスカメモリ…その名の通り、ナスカの地上絵、いえ、【神秘の記憶】が記録されたメモリ…マフラーを自由自在に変化させたり、エネルギー翼に変形させたりするメモリ、膨大な量の記憶が隠されており、引き出すたびに使用者に負担が掛かって死に至らしめる、パンドラの箱」

「…用は…放って置けば死ぬのね？」

「そうですね、中身が『人間』なら」

もしも不老不死の妖怪だったりすれば、ナスカの力を100%発揮し、それこそ最強のドーパントになるでしょうね…

「ああ、それなら大丈夫ね、妖力とか、霊力とかは感じ取れなかったし…普通の人間ね」

それなら安心…か

「しかし、今から私がそちらに向かいましょう、あのメモリは野放しにするには危険すぎる」

「だったら行くわよ、もしかしたら咲夜が死んでいるかも知れないし」

医者&amp;幼女移動中…

到着したのは、異常に眼に悪い真つ赤な館、紅魔館…  
そして、最初に出迎えてくれた物

吹っ飛んできたナスカドーパント

「……………あ？」

「……ははは……井坂……先生か……嘘じゃないか………いい……ほ……うこうになんか……」

ナスカドーパントの変身が解け、人間体に戻り、姿を現したのは……

「……宗一君……ですか」

「そつだよ……ああ……馬鹿だなあ……俺って……死ぬ前に英雄になろうなんて考えて……英雄は英雄になろうとした瞬間に失格なのに……さ」

……彼は、体が段々と風化していき……消えた

「……ナスカのメモリの二人目の犠牲者……ですか」

私はナスカメモリに近づこうとする

その瞬間、物凄い爆音と共に目の前を一つの紅い線が走る

「……!?」

「駄目だよ……？その【玩具】おもちゃは私が貰うんだから……横取りなんて……させないよ？」

幼さと狂気の混ざり合った声

私はそちらの方向を見る、

病的に白い肌、七色に発光する奇妙な翼、薄い黄色の髪、血のように真っ赤な瞳

「ほう……悪魔の妹……ですか、これは状況が悪いですねえ……」

「フラン?!何やってるのよ?!」

「お姉さま、見れば分かるでしょう?楽しそうな音がしたから出てみれば、みんなで遊んでるんだもん……私だけ仲間外れなんて……酷いよねえ?」

そついいながらも彼女は一步步ナスカメモリへと近づく、止めなくてはいけないのだが……

手足が動かない、動かすことが出来ない

「え……つと?これを……着けて……こうかな……?【N A Z C A!】ひゃあっ!?!あ、あはははは……びっくりしたあ……」

……何故でしょう、完璧にナスカメモリを使いこなせる化け物が出来

上がろうとしているのに、とても微笑ましい、つい顔がニヤけてしまう

…なんてやっている場合じゃないんですけどね…まあ、もう阻止は出来ませんし…

そんな事を言っていると、彼女はガイドライバーにナスカメモリを挿す

すると、二等辺三角形が交差する粒子が体を包み青い騎士のような姿へと変わる…身長も伸びる

だが、一つだけ違う点があった

背中から突き出している七色に光る翼…

「子供の相手は得意ではありませんが…やるだけやりましょう」

【WEATHER!】

機会音声が鳴り響き、直後に私は右耳にメモリを挿す、すると（以下略）

【ウェザー・ドールパント】へと変身する

「あれ？もしかして、私と遊んでくれるの？」

「ええ、遊びましょう、ただし…私が勝ったら診察させてもらいますけどねえ」

「うん？別にいいよ、どうせ負けないし」

「ほおう…随分と自信家なようだ…後悔しないでくださいよ？」

絶対に勝てないゲーム、それに勝利するには切札ジョーカーを使っしかない

Nの力は誰にも渡すな／アンノーン・キリヒコ・イット・カム・バック（前書き）

冴子さん本編でナス力っちゃったよ!!

まあ、いいか！

Nの力は誰にも渡すな／アンノーン・キリヒコ・イット・カム・バック

「これは非常に不味い状況よね？」

「ええ、勿論、私でも勝てるかどうかわかりませんねえ……吸血鬼のドーパントなど……」

私達の目線には体の調子を確認しているナスカ・ドーパント、いや、悪魔の妹……

「ところで……お嬢さん方、いえ、レミリア君……正直言って……逃げてもいいですかね？」

「却下よ」

……さて、どうした物か……私が肉体強化を繰り返し、今ではテラーと対等に戦えると言っても……

正直、力を100%発揮できるナスカなど……人間では不可能、よって未知数、

ただ一つ分かるのは……

テラーなど今のナスカの前では貧弱な人間一人の戦闘力にも満たない、という事

しかし、相手が吸血鬼なら……

「レミリア君、夜明けまで何時ですか？」

「……あと三十分で日が昇るわね」

三十分……持ちこたえられるでしょうか……？

「ん……着心地はそれなり……かな？」

向こう側で調子を確認していた悪魔の妹……いや、フラン君が此方に向かって来る

「では……外に出ましようか、ここでは十分に戦えません」

私は即座に横の窓から外へ出る……弁償？知りませんよ

……ナスカ&amp;ウエザー移動中

「あゝあ、いけないんだゝ窓割っちゃあ…」

降り立ったナスカがそんな事を言ってくる、その容姿に反して幼い声が不気味だ

しかし…それにしても…ナスカとは…なんと魅力的な…！殺してでも奪い取る…

「いやー失礼、しかし中で戦えばもつと物を壊しますよ？」

「…私のほうがもつと物を壊すよ？」

彼女が若干自嘲気味に言う…

直挿ししたら一瞬でメモリの毒素にやられそうですね…

「ああもう！暗い気分になっちゃったじゃない！責任取ってよね！」

そういいながら、彼女はマフラーを変化させ、翼を作る…オレンジ色の希望の色

違う、所々嫌気を感じる毒々しい紫色が混じっている、いや、全て

その色だ…！？

ナスカの色が…赤くなっている！？金やオレンジだった部分は白、青の部分は赤へ

まさか…あれがレベル3…！？…素晴らしい…素晴らしいぞ…ナスカメモリ…！

「その肉体は魅力的だなあ…無限の可能性に満ち溢れている…！」

「気持ち悪い事言わないでよ、…行くよ？」

赤いナスカ…ナスカ・スカーレットとでも呼びましょうか、略してナスカ

ナスカが剣を振りかざし襲い掛かってくる、単調だが、確実に急所を狙った攻撃…

だが、

「所詮そんなものですか…正直、失望しましたよ」

これなら楽に行けるかも知れませんか（フラグ1）

そうだ…帰ったら文君に食事を作らなくては…（フラグ2）

私…この戦いが終わったら…吸血鬼を診察するんだ…（フラグ3）

「あまり甘く見ないほうがいいかもよ？」

ナスカがそういうと、あたり一面に赤いエネルギー弾が乱射される…なるほど、これも人間には無理な話だ

レベル2の超高速、あれは人間の五感が追いつかず、死に至るそして今度のエネルギー弾連射、これは全て一個人が操作するので脳が焼ききれ、死に至る

だが…普段から高速で動き回り、大量の弾を連射していれば…？まさに…赤子の手を捻るより簡単にできるだろう…だが…

「正直、君の場合使わないほうが強かったかもしれないねえ？」  
強すぎる力に新たに力を加えると、力が限界を超え、0に戻る事がある

簡単に考えれば、昔のゲームなどで、所持金が限界を超えると0に戻るのと同じです

彼女の『ありとあらゆる物を破壊する程度の能力』それは既に限界に達していた

そこに新しくナスカメモリの『神秘の記憶』という強力な力を加えた、

それならまだ限界に達しなかったかも知れない、しかし…彼女はナスカメモリの力を100%引き出した、それにより…彼女の力はゼロ+ナスカの力に抑えられた、ゼロに戻せば、ただ単に弱点の多い子供

正直助かった…限界点を超えなければ三秒でも持つかどうか…

「何で…？何時もより力が出ない…！」

彼女の足はふら付き、剣を持つ手も震えている

「おや…朝日が見えてきましたねえ…」

徐々に明るくなる一面

「っ！？……卑怯者…！」

「おや、この遊びにルールがあったとは…知りませんでしたねえ…」  
私は軽く笑いながら言い放つ

「…絶対殺す……あれ…？体が…動かな…？！」

「ん？不調ですねえ、診察しま…冗談を言っている場合じゃないな



…早く館の中に運びこまなくては…」

…様子がおかしい、日光が当たっているのに、まったく変化がない…違う、変化はある…

赤が再び青へ戻っている、七色の羽は消え、毒々しい色の羽はオレンジ色へ

「ナスカメモリが…超人体のまま…フランドールと分離している…!?」

分離したナスカはフラン君を割れた窓から中に入れ、戻ってくる

「ふむ…君は…最近冴子に付き纏っている医者だな…?」

「…っ!? 意識がある…?」

「とりあえず、君の勘違いを解いて置こう、まず最初に…先ほどのエネルギー弾の連射はレベル3ではない、レベル3は自分の能力を底上げするだけだ」

「…聞いてもない説明を懇切丁寧にありがとうございます」

「それと、赤いのは別にレベル3ではないよ、シャ 専用…というのに近いね、能力は同じだけど」

「いや、別に何も聞いてな」

「何? 冴子と私の出会いが聞きたいって? フツ…いいだろう、あれは雪が降り積もる冬の事だった…」

「だから聞」

「私は…一日の販売ノルマの五倍のメモリを売りさばき、幹部から大事な話があると言われ…」

「だか」

「そこで出会ったのが冴子だった…雪に混じる彼女の姿は…力強く、冷徹で、何者も寄せ付けない美しさを持ち…」

「だ」

「そんな彼女が私に心を許す姿を見て私は一気に恋に落ちた…」

「人の話を聞けえっ!」

何だコイツは…人の話をまるで聞かない…

「おっと、話し込んでしまったね、お察しの通り、霧彦きりひこです」

「誰ですか…… ああ、冴子君の旦那か…… いやな、事件だったね…… まだ冴子君の死体が見つかってないんだろう？」

「は……？何を……」

「ナスカメモリは彼女が君を殺した後一時も離さず持っていたんですよ、それが、今はここにある、つまり…… 彼女は死んだ」

「は……？ はは…… 君は何を言っているんだ……？ 冴子が死んだ……？……」

「まあ…… いいか、彼女については吹っ切れたしね、今すぐ首を左右に振ってもいい、園崎霧彦…… いや須藤霧彦も吹っ切れた」

「しかし、彼は…… 精神体のドーパントにしては異常だ、喋ってる辺りが」

「…… その顔は、私の性質がわからない、といった感じだね……？ アンノーン…… Unknown…… 正体不明、いい響きじゃないか？」

「失礼、私はこれでもドーパントについて研究してましてねえ…… はつきりしない者、気になる物は、はつきりさせたいんですよ…… どのような手を使っても、たとえ死者が出てもね……？」

「腐った典型的な人間だな…… まあ、いい、私は…… 冴子に殺され、メモリに残留思念だけが残った…… そして、この世界に現れ、残留思念が強くなり、さらに、一時期とはいえ、吸血鬼と一体化した（not 性的な意味）…… そして、実態を持つに至った訳さ」

なるほど…… 理解できない

「ついでに言えば…… 君と戦う気もない」

そっぴいながら、ナスカは変身を解く

凜とした表情、整った肉体、それはまさに肉体美を体現していた…… ただ

「全裸ですよ」

「…………… 私は紅魔館に住もうと思うんだ」

「全力で拒否するわ」

窓から見ていたレミリア君が顔を真っ青にして言う

「ええ……？ いいじゃない、お姉さま、結構イケメンだし、面白そうよ？」

「何よ、フラン、私に逆らうの？」

「逆らうわよ、だって、吸血鬼だもの」

「煩いわね、妹のクセに」

「何よ、年増のロリババア」

「む…引きこもり！」

「何よすぐにイライラして…だからお姉さまは子供なのよ」

「煩いわね！アンタのが五歳年下よ！」

「年で考える辺りが子供っぽいわね」

「うるさい！うるさい！うるさい！私は大人よ！？」

「大人ってのは…大人になろうとした瞬間に大人失格なのよね」

「殺してやる！殺してやるから動くんじゃないわよ！？」

「騒がないの、お姉さま、見つとも無いわ」

「殺してやる…！フラン、姉の意地を見せてあげるわ…！」

「ああ！お嬢様が妹様に馬乗りに…！私も参戦します！」

「…とても話ができる状態ではない…」

「…どうするんですか？話ができる状態では…」

霧彦君の姿を見る、すると…いつの間にか真っ黒なスーツに一点だけ血の染まったように赤い白いスカーフ

「…日本国旗？…それより、何処から…」

「神秘の力だよ、では…私はこちら辺で…」

結局霧彦君は紅魔館に住むことになった…どうやら、メイド長との

愛称が悪いらしい…

須藤…雅史？ちがう、須藤霧彦君、ナスカメモリの所持者…

…彼は私のようにメモリを集めて回るそうだが、これでは…まるで…憎い風都の仮面ライダーみたいじゃないか…

まあいいか、次回あたり寺小屋が襲われそうなんだが……ん？次回？

Nの力は誰にも渡すな／アンノーン・キリヒコ・イット・カム・バック（後書き）

なぜ尻彦さん：霧彦さんを紅魔館メンバーに加えたかだって…？

霧彦さんはロリ&amp;amp;amp;シヨタコンだkうわなにするやめrくあ

wse d r f t g y ふじこ1p

……なぜ殺たし…

## フルパワーVノ騒がしい朝食（前書き）

「加頭順どうして私を助けるの？」

「好きだからですよ。貴女が」

「こんな心のこもってない告白は初めてだわ」

「……（カラン）」

このシーンで順君に萌えてしまった私はおかしいのか、否、正常だ『じゅん』といえば

SIRENの『神代淳』を思い出します、私だけでしょうか

そして『神代淳』といえばSIREN：NTの『犀賀省吾』…彼の言葉には興奮を覚えましたね

「俺はダンテではない、ベアトリーチエの導きは期待できない…」

そして犀賀先生と言えば、『宮田司郎』彼を思い出しますねえ…ネイルハンマー片手に、恋人の妹を殺して

「やっぱり姉妹だなあ！死に顔もよく似ているよ！」

とか言い出すあの人…そして先生と言えば…もちろん

井坂先生イイー！！井坂先生のアブノーマルっぷりは世界ーイイーッ！！

## フルパワーVノ騒がしい朝食

とある朝、多くの者にとって、それは突然に起きた

「……いろいろと聞きたい事はあるんですけどねえ…まず、何故桜君が此処に…？」

「突撃、知り合いの朝ごはんって事でお願いします」

朝起きて、さあ、料理作るぞーとか意気込んでいる私の前には、まだ寝ている文君に何かの薬を注入しようとしている桜君の姿があった…

「…なんですか？その薬…」

「媚薬です」

わからない、何故、此処でその薬の名前が出てくるのかわからない  
「何に使うんですか…？」

「射命丸さんに打ち込んで人里に置き去りにし、無様な姿を笑います」

…ええ？

「男共に集られて襲われる射命丸さん…ウッフ…アハハハハ！！」

「駄目だこの白狼天狗…早く何とかしないと…」

「さて、桜、ちょっと表に出ろ」

「うわ射命丸さん、起きてたんですか…お、おはようございます！」

…十分ほどありがたいお話（肉体言語）…

「右手が…！私の右手があああ…！」

帰ってきた桜君の右手の間接は逆に曲がっていました…一体…何を…

「…桜ってさ、キヤラ固まってないよね」

「確かに…そうですね…」

「え？あ？それってあれですか？語尾に『にゃあ』とか付けると言ってるんですか？」

誰もそうとは言っていないんですけどねえ…

「馬鹿馬鹿しい…そんなのイタイだけじゃないですか、全く…あ、それともあれですか？自分の事わっち、って呼べと？くれない？をくりやれ？と言えと？馬鹿ですか？この戯けが」

…若干暴走気味ですね…

「とういか、『藍しゃま』って呼ばれて『ちえええええええええええええん！』って叫ぶとか…騒々しい上にイタイ…最低じゃないですか、正直首吊って欲しいですね」

「（…桜君はいつもこんな感じなんですか？）」

「（これだけ不安定だと…恐らく発情してますね）」

発情…？別にどうでもいいですが…

「私の愛を否定するなああああッ！！」

「うわ、パペティアーが何故此処に…あ、違いましたか…九尾の狐？」

「貴女は妖怪の山主権領域を犯しています。速やかに撤去して下さい。さもなければ実力で排除します」

「フン…、白狼天狗の犬走桜か。私を激情させた元凶が、何を偉そうに。」

「ラインアークに帰ってください」

「貴様には墓の下がお似合いだ」

「どうしても…戦うしかないのですね…」

「だからラインアークに帰れと…もういいです、文君朝食にしましよう」

「了解です」

隣で戦いあっている桜君と九尾の狐

「アスラアアアアアアン！！」

「キイラアアアアアアアア！！」

もう…色々違う…

「違う！私はキラなんかじゃない！信じてくれよ！」

「いいえ、藍君、あなたはキラです」

死ノート…

「ええい！大人しくしろ！この媚薬を打ち込んで人里に全裸で放してやる！！男共のエサになるがいい！！」

「くっ、離せ！こいつ…何故こんなに強い…！？」

「理由知っていますか？文君」

「知りません」

「なんかドライだな…」

「やめろー！藍しゃまに何をするー！！」

「橙！だめだ！こつちに来るな！」

次に出てくるのは化け猫…あれ…九尾？…！！私は何をやっているんだ…！！のんびりと朝食を取っている場合じゃない…！！血液サンプルだけでも取らなくては…！！

「少し、診察してきますかね…」

「（井坂先生つて…ロリコンなんですかね…）」

「何か言いましたか？」

「イ、イエーナルボ！」

「後でじっくり診察させてもらいます」

「ウ、ウエエエ！？」

「オンドウル化しても無駄ですよ、聞き取れますから」

「ウゾダドンドコドン！」

…文君も若干おかしいですねえ…情緒不安定と言つか…

そもそも、私の五感が鈍っているのも…

まさか…毒？

…診察の後でいいか

「うわっ！？」

「ふふふふ…大人しくしないと…少々痛いですよ？」

「井坂先生！ナイス援護！」

「む、無理無理無理！そんなに太いの入らないよお…（注射針の事です）」

「大丈夫ですよ、多少血が出るかも知れませんがねえ…（初めて



でなくても出ます)」

「き、貴様ああああ！―橙に何やって…！くっ…！離せ！」

私は、化け猫を押さえ込み、無理やり（注射針を）刺す

「い、痛い痛い痛い！（血管注射なのでそこまで痛くありません）」

「

「ちええええええええええごふっ！？ぶ、打ったな！親父にも打たれた事が無いのにーっ！」

「あなた、親父居ないでしょう…」

…騒がしいなあ…だがそれがいい

くしばらくの戦闘の後、椋君がリンチされ、終了、私は人里へく

「…すごい毒ですねえ…人里が原点でしたか…」

人里へ付くと、思わず朝食を戻しそうになった…物凄い毒が充満していた

「何があつたんですか…？これは…」

「い、井坂先生か…！毒を振りまく妖怪が突然里に下りてきて…！なんか…先生が探している『ガイアメモリ』って奴を使って…！先生と同じように変身して…！その結果がこうだよ！」

「そうでしたか…メモリは…『VIRUS>バイラス<』…」

有機物、無機物すべてに感染し、意のままに操り、瞬時に死に至らしめる。又は、同効果のウィルスの散布。長い舌を使用しての拘束、攻撃。細菌粒子化しての瞬間移動など、強力な能力をいくつも持つ強力なドーパント…

しかし、今の所、死者が出ていない所…

ちなみに、私がウェザーに変身出来る事は人里の人は八割方知っています、たまに来る妖怪を撃退してますしね

「とりあえず…このウィルスにかかった人間はバイラスの所持者の意のままのタイミングで殺される…所持者がその事に気が付く前に対処しなくては…」

ならばまずは簡単…上白沢慧音君かみしろなむけいねに頼んで人を隠してもらいましうかね…さすがにバイラスとは言え…歴史上隠された人間を殺すことなど…不可能でしょう  
そうと決まれば…まずは…寺小屋へ

中年移動中…

たどり着いた寺小屋、中から物凄い殺気を感じるのですが…気のせい気のせい

「慧音君、居ま（シュゴツ）つとと…危ないですねえ…」

突然頬を炎が掠った

「誰だ…？この毒をばら撒いた奴か…？」

「違いますよ、慧音君に用事があるんですよ」

彼女は確か…藤原妹紅君ふじわらのもこう…

不老不死というどう考えても薬物投与人体実験の為に生まれてきた最高の実験動物…

おっと、本音が…

「この毒は…ばら撒いた本人が感染者を殺そうと思えば一瞬で殺す事が可能です、だからその前に、人々を隠して欲しいのですが…」

「無理だ、慧音は…慧音は…今では息をする事さえやっただ…」

「……何故？」

「寺小屋を襲った妖怪の毒を生徒達を庇って全部受けたんだ…」

なるほど…彼女らしいな…

「クソッ…！私は何もできなかった…このやり場の無い怒りをどうすればいい…？」

彼女は壁を拳で強く叩き、齒軋りをし、物凄い形相で空中を見つめている…

やはり…おかしい、朝から思うが…精神的に異常を犯している人間が多い…これも毒か…？

違う…これはそんな物じゃない…

まあ、これの解明は後回し、先にバイラスを潰さなくては…

「簡単ですよ、犯人を潰せばいい、…今、里に下りてきたようですね？」

後ろで響き渡る悲鳴、…！？…へ、平衡感覚がぶれて…！？

「…！？大丈夫か…？私が行く、お前は休んでるといいさ…どの道、来ても戦えないんだ」

そっくり、彼女は寺小屋を出て行く、私は、即座に右のポケットからウエザーを取り出し、右耳のコネクタに挿す

【WEATHER！】

ウエザーに変身すると、今までの不調が嘘のように消えていく

「…なるほど、この精神に異常をもたらす毒が分かりましたよ…

犯人は…最初から毒を使える存在、そしてバイラス…ならば…これは…【バイラスの毒素を放出した毒】…考える物ですねえ…メモリの毒素を自分の能力の毒と組み合わせて放出するとは…」

とりあえず私は思う、このバイラスのメモリの所持者は…

逸材である、と

ならば…捕まえて…死ぬまで実験を繰り返すだけです、使える素材は使い込む、これが私の中での常識

## フルパワーVノ騒がしい朝食（後書き）

バイラス：正直チートですね、ひとつの街をアウトブレイクさせ、  
死の街に変えるって：バイオか！

フルパワーV／細菌消毒には地獄の炎を（前書き）

足りない……井坂先生への信仰が……っ！！

## フルパワーV／細菌消毒には地獄の炎を

外に出れば、緑色の醜い怪物…いえ、素晴らしい肉体…ナス力は手に入れ損ねたが…今度こそは…！

「ほおう…あれが肉体が変化したバイラス…！素晴らしい毒の濃度だあ…！！無限の可能性に満ち溢れている…！！」

「……その言動は…医者だな？」

…妹紅君が怖い目でこちらを見てくる…しかし、彼女も随分散布された毒気にやられているな…普段は女言葉なのに、男言葉になっている…確か…殺意を余程覚えたときにしかなかった気がするなあ…

「そうですよ、清く正しい井坂深紅郎ですよ」

文君の真似を試してみる、私も随分毒気にやられてますねえ…さつさと片付けなくては…

「本当に凄い毒ね…これなら世界征服も狙えるわ！」

見た目に反して幼い…以下略、この世界のドーパントは反する奴しか居ないだろう…

「毒物バカが居ますねえ…ホルマリン漬けにして飾りたいですね」

「む、その声は…噂の変態医者！」

噂になつていたんですか……変態医者？

「変態医者とは失礼な…」

「だって、新聞に書いてあるし、変態医者って」

八割方文君でしょう、後で口の中にホルマリン漬けにしてた肝臓でも打ち込みますかね？持ってませんけど

「妹紅君、焼き尽くすんだ、今すぐに」

まあ…その記事を読んだ人物を全て片付ければ解決、という事で…

「言われなくてもそのつもりだ……細胞の一つさえ残す物か…！」

彼女は右手に炎を集める、いや…凄く熱気ですねえ…周りの細菌がどんどん死滅していくのが分かる…

というより、バイラス自体…戦闘能力は無いに等しい…

ので、この一撃で沈むでしょう、しかし…それは…私も手を加えなくては…！………こういう時つてのは、力を合わせるものでしょう？  
ライダーツインマキシマム…とか？

「炎を圧縮圧縮ウ…」

駄目だ、隣の妹紅さんぶつ飛んでますね、脳のネジが……  
どうするか…？

いや、私も参戦しよう

「妹紅君、此処は展開的に合体技でもやるべきでしょう」

「…それもそうね…」

女言葉に戻っている…！！落ち着いたのか？落ち着いたと見せかけてまだ怒りは収まってない、とかだと洒落になりません…

「では…私の『晴れ』による熱線と、貴女のフジヤマヴォルケイノ…  
…でしたっけ？で行きましょう」

「だが断る、この藤原妹紅が最も好きな事の一つは自分より強い…  
強い？お前、私より強いか？」

「いや、知りませんよ、………不死より強い奴は居ないんじゃないですか？」

「ええ…じゃあ、NOって言えないじゃないか…」

「ですなぁ…」

「じゃあ、あまり無理の無いような感じで…」

彼女はそういいながら、スペルカード……でしたっけね、まあ、スペルカードを取り出す、これは弾幕ごっこでも何でもないので、スペルカードを何も言わずに発動していいんですけどねえ…

「行くよ！？無理が無いようにね！？お願いだから！」

即興で作るスペルカード……不安ですなぁ……二人で意思を合わせれば…  
…というか、本来スペルカードって技を保管して置く物じゃ…

………？右手にスペルカード……そんなご都合主義な……まるで…世界の破壊者みたいじゃないですか…

「…？私、こんなスペルカード持ってたっけな…？まあ、いいや、

これを使えって事だろ、大体分かってる」

もやし…違う妹紅君がそういいながら、一枚のスペルカードを取り出す、まあ…ご都合仕様でなんとかありますかね

「「獄炎『超自然発火 - 滅び行くソドムへのレクイエム - 』！！長ッ！！名前長いっ！」いい響きだ…無限の可能性に満ち溢れている…」

直後、バイラス……ドーパントを急に炎が包み込み、動きを封じる……

……おかしい、わざと攻撃を受けているような…直後に空が晴れ、太陽が現れ、その光を浴びたバイラスドーパントは十字の形に体を固定され、

太陽から青白く、虹色で、尚且つ赤い、というか見る角度で色が違う光線が、放たれ、バイラスドーパントを焼き尽くす…

そうか…分かったぞ？！奴の狙いが…！メモリがブレイクされた時、使用者に多大な毒素を植え付ける、その毒素をさらに散布する気が…！

フッフ…その作戦は失敗ですね…なぜなら、この攻撃ではメモリブレイク出来な

「わ、私のメモリがっ…なんてね…計画通り…！！」

畜生、メモリブレイクの効果が付属していたのか…っ！彼女…の周りにどす黒いオーラが纏わり付き、一斉に村に放たれる

まず最初の犠牲者は…妹紅君…

「ヒヤ…ヒヤハハハハハ！！私の火力は幻想郷…イイイッ！！」

精神崩壊してやがる…！

『弾幕はあ！パワーだぜえええ！！』

「（；O M O）>ウワアアアアア（もこたんです）」  
今、一瞬ビビリのライダーの顔が見えたような…

…というより妹紅君が、空より降り注いだ光線に消し飛ばされた…早くしないと…死亡者が急上昇する…！！

「リイザレクシヨオオオオンッッ！！私の再生力も幻想郷…イイイッ！！」



最高にハイになっている…！普通の人間なら別にかまわないが、こ  
こら辺は普通な奴が居ないから…

『最高にハイって奴ね！アハハ！アハハハハ！』

『デデデデストロイ ナナナインボー』

？だからナインボール…違う、ええ、メモリの毒素を中和なんて聞  
いたことも無い！どうしろと！？

『ヒ…ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！！ネタだあ！！ネタが溢れ返るほど  
お！！』

文君…！ツ！！

『駄目だ…鬱だ死のう…九尾に喧嘩売って生き残れるはずが無い…』  
も、桜君は鬱の方向に毒素が回っている…

『ちええええええええええええええええええええええ（ry  
九尾の狐が吠えている…

「お困りの様だね？名医君」

その声は…

「…霧彦君ですか…一体何の用ですか？」

「フフフ…今、この人里は、精神状態が異常に高ぶってたり、落ち  
込んでいたりで、滅茶苦茶だ…だが…精神の状態を操作出来れば…  
！頼むよ！プリズムリバー三姉妹！」

ええと…確か…鬱、躁、幻想の音をそれぞれ表す…だったかな…あ、  
最後のは要りませんが…

「そう！彼女達の力で精神状態を落ち着かせるんだ！…あたいった  
ら天才なんだか…危ない、そろそろ私も毒素にやられてきたようだ  
…ふう、落ち着け霧彦、ここはアラスカだ…」

アラスカ？

その後、彼女達の素晴らしい演奏と私の健康診断により、人里は昔  
より多少おかしいけど元に戻ったとか…唯一の被害者は、テンショ  
ンが上がりまくって全裸で暴れたした妹紅君だった……

所謂『シンゴー！シンゴー！』状態だった、それと…焼き鳥となっ  
た哀れな鴉天狗…恐らく文君…でしょう、外見では分からないほど

ボロボロになっている、全裸の写真でも取ったのでしょ…

…あと、博麗の巫女が妙な神を拝み始めたとか…『トモダチ』とか

言いましたかね…

ウィルス  
細菌つながりですか…

…バイラス所持者は消えていた、メモリの発信源を聞きかっただけですがねえ…

## フルパワーV/細菌消毒には地獄の炎を（後書き）

次回、感動の最終回（嘘）！

射命丸と…井坂の恋は無事にゴールインできるのか！？（大嘘）

霧彦はルーミアと一体化したスキマババアを倒すことが出来るのか

！？（大嘘）

そして…レミリアが子供か大人かで判断を苦しむ霧彦の決断とは！

？（割と嘘）

次回 東方恋愛劇 最終回

『ナインボールゲームの末に…』

放送枠延長で、何と2時間スペシャル！番組の最後には『ナスカメモリ（本物）』を抽選でプレゼントするメモリプレゼントコーナーの応募方法が載ってるぞ！絶対みのがし…すみません

時々活動報告で短編小説を書いている事があります、本編が更新されなかった時はそちらをご覧ください

## 惹かれるA / 逃げるメモリ群（前書き）

核融合を操る程度の能力つて、井坂先生の格好の的じゃないか…  
天候に核融合操れば井坂先生も満足だろうに…

## 惹かれるA / 逃げるメモリ群

少し幻想郷を離れて風都にある私立探偵事務所にて…

目を擦りながらゆっくりと体を起こす青年、自称ハードボイルド（ひたじょうたろう）  
笑）探偵、左翔太郎

彼は起きた時に一つの疑問を感じた、肌身離さず持っているはずの物が無い

「…？ おいおい冗談だろ…？ ハハハ…」

彼は目的の物が閉まってありそんな場所を全て探すが、見当たらない

「……ハハ……メモリがねえ……」

彼の表情は凍りつき、だんだん青白くなり、自分の相棒である、フイリップ・マローウの名前から取った名前を持つ、自他共認める超天才、フイリップの元へ急ぐ

「おいフイリップ（翔太郎）！！メモリがねえ（無いよ）！！」「  
全く同じ会話が飛ぶ

少し落ち着いて、状況確認

「ドライバーはある…無いのは、サイクロン、ヒート、ルナ、ジョーカー、メタル、トリガー…」

「それにファングも無い…エクストリームは分からないな……」

「ギジメモリはあるんだろ…？ 一体なんだよ…？」

「…幹部の仕業かも知れない、園崎若菜…姉さんにはこの事務所の場所はバレている」

「そんな…完全防備だったはずだぜ？」

「ゾーン、ああいう空間操作系のメモリなら…」

「…なるほどな…」

彼らが異常事態に頭を悩ませていると、事務所のドアが開いた、そこに居るのは赤い皮ジャンを着た刑事、照井竜だ

「…左、俺のメモリを知らないか？」

「「お前（君）もかつ！（…）」」

そして、刑事に事情説明

「…なるほどな…一体何が起きてるのか…：ドーナツが現れないのを願うだけだな…」

「ああ、そうだね…ところで、照井竜、この間のケツァコルトスの過剰適合者の彼女とのその後はどうなったんだい？」

「俺に…：質問するな…！」

一方、幹部と呼ばれた者達は…

「お父様、どの工場のラインからも、この家の倉庫からも…：ガイアメモリが一つも見つかりませんわ…」

「…ふむ、異常事態、…一体何処の誰が犯人なのかな…：知らないか？やくもゆかり八雲紫！居るんだろっ！」

お父様、と言われた園咲琉兵衛は声<sup>そのざきりゆうへい</sup>を上げる、すると、空間に奇妙な隙間が開き、中から紫と白の現代<sup>むじさきだよゆかりじゃないよ</sup>的な服とは全く言えず、民族衣装と言うにも若干厳しい奇妙な服を着た金髪の女性が現れた（女性であつて、少女ではない、これが示す事…：おや、誰か来たようだ…）

「…！」

「はっはっはっは…：そう身構えるな若菜、貴重なお客さんだ」

身構える園咲家次女、園咲 若菜<sup>わかな</sup>が身構えるが、琉兵衛はまるで子供を落ち着かせるようなゆっくりとした声で、言い聞かせる

「…：八雲紫、一体何が目的なのかね？」

そして、次に琉兵衛が放つ言葉は恐怖の象徴と言ってもいい程の声で隙間から半身だけ出している女性女性であ…：誰か来たようだ…：紫に話し掛ける

「あら、私は貴方が面白そうな物を持っていたから少し拝借しただ

けですわ」

しかし、全く恐怖を感じないといった様子で、紫は薄く笑い、言う  
「何処でガイアメモリの存在を知った？」

「井坂深紅郎と言う医者からの情報源、というより、監視している  
内に見つけただけですけどね」

「…また井坂君か…彼は私にどれだけ…いや、この園咲家にどれだ  
け迷惑を掛ければ気が済むのかね…」

「私は最初から気に入りませんでしたわ、あの男…」

もはや、園咲家にとって井坂深紅郎は、家族をバラバラに引き裂い  
た悪魔のような物である

「悪い事は言わない、ガイアメモリを返したまえ」

再び琉兵衛は言うが、紫は薄笑いから表情を全く変えず、言い放つ  
「悪いのですけど…お断りしますわ、あの道具…中々妖怪と絡み合  
うと面白いんですよ？」

「面白い…か」

「それに、此方げんそうきょうの世界にはそちらの世界で壊されたメモリが流れ着  
いてるんですよ？」

「ほう…」

「飽きたら、壊されたメモリも含めて全てお返ししますわ、それで  
勘弁を」

「…いいだろう、若菜、全てのラインにメモリの製造を作れと命令  
を出してくれ」

「しかし…此方に利益が無いのでは…」

「利益ならありますわよ？此方でしか手に入らない妖怪データの情報をお  
伝えしますわ」

「と、言う事だ、若菜」

「…分かりましたわ…」

そして、話の舞台は幻想郷へ…

「ということがあったのよ」

「…そうですか…」

状況を説明しましょう、毒素が抜けなかった、というより面白いので抜かなかった椋君が寝起きの文君を襲うという行事を済ませ、さあ朝食だ！という時に、急に隙間が開いて、テーブルの上の朝食を全部押しのけて、八雲紫、スキマ妖怪が現れ、朝食が無駄になるというイベントを終え、尚且つ、ガイアメモリ全部持ってきたと言われた、という事です

「…ちょ…朝食が…最近朝食を取り始めた所為で朝食を取らないと何時もの二分の一の力しか出せないと言うのに…」

落ち込む文君、実は彼女の朝食には…いえ、何でもありません  
そしてスキマに消える紫君…どうした物か…とりあえず…病院に行くか…

医者移動中…

…道中、妙な物を見つけました…

「…ええー…」

首を吊る妹紅君、というか既にぶら下がっている…  
だけど死なない…

「……あ、井坂先生、助けられないかな、気が動転して首を吊ったけど、死ねず、降りれないのよ」

…知りませんよ…全裸になったの自分じゃないですか…

「…おおっと、もうこんな時間ですか…急がないと…」

「待て！無視するな！」

横から怒号が聞こえてきますが…見なかった事に、聞かなかった事にしましょう

医者、再び移動中…





ど……！！

「おお、外の人間にしては核の誤解が無いね、そつだよ核は最高に良いよ」

「お褒めの言葉ありがとうございます」

「だから……」

「では……」

「『この力は誰にも渡さないよ』」

『その力を私にも分けてくれませんかね』」

直後、彼女の手から熱線のような物が放たれる、…違う…核だ、核を濃縮した物だ…

「素晴らしい……！！実に素晴らしい……！！その力さえあれば…テラ…など…要らない……！！」

私は右手を上げ、彼女に雷を落とす

「おおつと…悪いけど、その能力…知っているよ？…言わば『天候を操る程度の能力』だろう？」

「フフフ…そうですよ、素晴らしい能力だと思いますかねえ…？」

「全ツ然？だつて…自然の力に頼ってるだけじゃない、そんなんじや核には勝てないよ？」

核の前では…自然など無意味、という事ですかねえ…

【WEATHER】のメモリが自然の象徴なら

『核融合を操る程度の能力』は科学の象徴

「核融合の研究のモットーは…地上に太陽を…でしたかねえ…」

「知らないよ、外の事なんて」

そついいながら、彼女は再び熱線を放ってくる

「じゃあ、私も混じらせて貰おうかな…超高速！」

ナスカが空君に高速で迫る

「ちょこまか動いても変わらないよ！どうせ見てないから」

そついい、彼女は熱弾を乱射する、どうやら、あれも核を濃縮した物…妖怪ならまだしも、元々人間の私達が当たったら、いえ、かすりでもしたら即死でしょうね

「…！」

ナスカは一瞬怯んだが、自分から難易度の高い方へ進んでいく  
「なるほど…訓練、という事ですか…超高速へ体を追い付かせるための…」

ナスカは次々と弾を避ける、そして、避け終わり、空君へ切りかかる

「ふんっ！」

「おおっと、…危ない物振り回してるね、あ、核を持ってる私が言える事じゃないか」

彼女は薄笑いを浮かべながらナスカブレード（あの剣）を左手で押さえ、ナスカの胸部を踏みつけ、右手のオンバシラっぽい物を顔に押し付け

「消し飛べ」

熱線をゼロ距離で打ち出す

「ッ！？うわああああ！！！」

即死、でしょうかね…あ、元々死んでましたね、彼…ん？

「…やっぱり幻想郷は…いい風が吹くなあ…」

上半身が消し飛んだはずの霧彦君が完全に復活し、隣に立っている

「…何故生きているんです？」

「あれ？消し飛んでいない。出力が低下したかなあ」

「私は…先日、レミリアちゃんの仕業で吸血鬼化してしまったんだ

…」

「説明を詳しく求めます」

「医者と同じく」

「…いやあ…夜の格闘技中にカプツとやられてね…血を送り込まれた」

「…Why？」

「いや…何故かフランちゃんとレミリアちゃんから婚約を申し込まれて…取り合いになって…夜這いされて…悪いね、此処から先は色々な都合で言えないよ」

まあ…顔はいいし、性格も…幻想郷ではまともですし…

何より子供受けする性格ですしね、納得いきますよ

「…だけど…私にそういう趣味は無いしね…」

「嘘だッー!!」

それはウソ

「…えい」

彼女が熱線を打ち出してくる、とっさに私とナス力は避ける

そして私は…空君を『雨』の能力を使い拘束＋溺れさせる作戦に出る  
空君の周りに水が集まり、拘束し、酸素を奪っていく

「…!? ……!!」

しかし、彼女は…核を融合させ、熱で水を蒸発させる…

「…げほっ…ふう、驚いた…まあ、いいや、実は…こっちも本気は出して無いんだよね」

【ARMS!】

彼女がメモリを取り出し、機会音声を鳴り響かすと…

左手に差し込む

すると、通常なら右手が変化するはずが、左手が剣へ変化した  
しかも、変化したのは左手のみだった…

「アームズのメモリか…【利き手】を武器へ変化させるメモリ…何処から手に入れたんだかなあ…」

彼女は右手を鋏はさみのような形へ変化させる

「さて、今までの序曲、これからが最終楽章、だよ」

私に転機をもたらす戦いが始まった…

惹かれるA / 逃げるメモリ群（後書き）

…実は…イサウツで行こうと思うんだ…  
冴子？誰それ食…誰か来たようだ…

## 惹かれるAノ熱かい悩む神の火（前書き）

最近、妹紅たんにもっこにされる事に快感を覚え始めた私はどうすれば…

いえ、嘘ですけど…

妹紅さんのキャラは好きだが、ゲーム的にはトラウマなんだ、うん  
初回プレイの時の酷かった…

「ヤバイ…けーね先生鬼畜すぎだろ…もう残機ないし…正直調子乗  
つてたな…」

「お？きみは　いくえふめいに　なっていた　もこうくん　じゃな  
いか！」

「うつわ…さすがEXボス…弹幕濃いよ！何やってんの！」

「…ん？今のは死亡エフェクト…なるほど、EXには中ボスが二人  
いるのね」

「とりあえず回」

>リザレクション<

「ちょ、つま！」

ピチューン…（まさかの出現ポイントとジャストで重なり死亡）

「……じょ……冗談じゃ……」

あれ以降、妹紅さんの立ち絵と目線を合わせられません

## 惹かれるA／熱かい悩む神の火

「さて…霧彦君…左腕だけが変わったのは…別にいいとして…夜の格闘技について詳しい説明を求めます」

「おおい！突っ込んでよ！左手だけ変わるって珍しいでしょ！？おおい！！」

「ああ…夜這いされ、見事に回避した私だが…何故かツイスターゲームをやろうと言う話になってね…」

「何でだよ！突っ込みどころが多すぎる！」

「それで…中々勝負が付かなくて…『霧彦！吸血鬼にされたくなければ負けなさい！』『悪いね、私は案外子供っぽくてね、負けるのが大嫌いなんだ』『じゃあ死ね』…で噛み付かれて吸血鬼に…」

「なるほど、ベット上での格闘技では…なかったんですね、ふう、一瞬君の事を極度のロリコンかと思ってしまいましたよ」

「失礼な、私は幼女趣味などは全く無い、それに妹系キャラもだ、ああいうのを恋愛対象に取れるのは実際に妹が居ない人間だけだ」

「……左手に付いて突っ込みなよ！」

痺れを切らした空君が怒鳴り声を上げる

「あーはいはい、ナンダロウソノヒダリテハーフツウノドーパントチガウナー（超棒）」

霧彦君の棒読み、凄い棒読み、どれくらい棒読みかと言うと、音読ソフトぐらい棒読み

「…全力で消し飛ばしたい…聞いて驚くな！何故左手だけが変わったかと言うと…言う…という…と…」

…そのオチだけは勘弁してくださいよ？

「なんでだっけ…」

…  
「うわぁ…凄いテンション下がりますね…」

「や、やった！作戦通り！私ったら天才ね！」

「？が混ざってるよ」

とりあえず…テンションが下がった事で少し冷静に戦えるでしょうね…

「う、うるさい！もういいよ！なるべく使っなくなって言われたけど！」

【QUETZALCOATLUS！】

あれは…ケツアルコアトルスのメモリ…何故彼女が…！

直後、彼女は首筋にメモリを挿す、そしてアームドのメモリが排出される、…その姿は、まるで使われてないのに捨てられたゴム手袋のように物悲しげに見えた

そして、彼女の体は急に燃え出し、まるで、爆発する寸前の太陽のように膨張し、周りの物を次々と壊し、翼端長12m 体長6m 体重2.8tの化け物に姿を変える…

「あれが…ケツアルコアトルス…なんてプレッシャーだ…」

彼女は耳を劈くような甲高い声を上げ、飛び立つ

よく見れば…右翼の付け根に巨大化した、先ほどのオンバシラのような物や、右足、左足、胸部、全てに変身前と同じような物がある…という事は…

「核も使う…んですかねえ…勝てる気がしない…」

「名医君は確か飛べなかつたんだよね…つまり、私単独でやれと…」

「そういう事です、というか日光浴びて何故大丈夫なんですかねえ？」

「ナスカに変身しているからだろう」

「理解できない！」

そんな事を言っている間に、彼女は放射能の熱線を乱射しながら、突っ込んでくる、ついでに翼から羽の形をしたエネルギー弾を飛ばしてくる

「…っ！ととと…危ないですねえ…さつさと片付けてくださいよ」  
直後にナスカは飛び立ち、ケツアルコアトルスに切りかかる、が…  
全く効いていない…と思いきや、割かし効いている…

「…暇ですねえ…」



空で激戦が行われているのに、私は何も出来ない…別にどうでもいいですけどね

『ナスカブレードに切れぬ物など殆ど無い!』

『私の必殺技は百二十六式まであるぞ!』

『私の必殺技：パート2、!』

…激戦…

「よっしやああ!!古龍倒したあああ!!」

「お帰り…」

空君を背負って帰ってきたナスカ、霧彦君

「…彼女は君に渡そう、好きに使ってくれ…」

「…そうさせてもらいますよ…フフフ…」

…空を自由に飛びたいな…

「ケツアルコアトルスは…?」

「…あー…落とした」

「落とした!?バカか君は!」

この後、かなり長い口論の後…

さらに医者移動中…

「…どうなっているんだ…これ…」

医院にたどり着くと…

行列が出来ていた…

「一体何が…」

「おお!先生!医者辞めて探偵になるんだって!?!」

「なん…だと…!?!?」

よく見れば、井坂医院が…井坂探偵事務所に…!!

そして右下に…

達筆…八雲紫

「あ…あの…スキマババアアアアアアアア!」

「とにかく先生!頑張ってくれよ!みんな頼りにしてるからな!」

「先生！」

「先生！」

「ハハハ…ハハハハハ…」

…私は、八雲家を皆殺しにする事、そして、医者の本業に探偵を副業にする事にしましたが…

…これじゃあ、本当に仮面ライダーじゃないですか…

「いやいや…いやいやいや…」

…

私の…人生に…転機が訪れた……………

「ああ…ちょうどいい縄は何処にありましたっけ…？妹紅さんと並んで死にましょう…」

## 惹かれるAノ熱かい悩む神の火（後書き）

モッコーさんは私のトラウマです

みすちーさんも私のトラウマです

イナバの兎とかも私のトラウマです

東方とか、トラウマの宝庫です

そして何より…

小説を書いている時にブレーカーが落ちるのが一番のトラウマです…

今回もその犠牲、本来はもっと長かったのに…

申し訳ありません、このような小説で

丁な白黒と乙な紅白／偽りの幸せ（前書き）

地霊殿をプレイしたんですけど…なんていうか…ええ…うん…  
空さん…マジパネエっす…

## 丁な白黒と乙な紅白／偽りの幸せ

気持ちのいい朝が来た……もう動きたくない、正直生きるのが嫌になつてきましたよ……

「井坂先生ーッ！ー朝食まだですかー！？」

……文君が叫んでいるのが分かる、……仕方が無い……

「分かりました……今作りますよ……地獄の麻婆豆腐……で、いいか……」  
わたしはそういつて、ドアを開ける、すると……

鴉天狗の文君が一人

白狼天狗の椀君が一人

……八咫鳥を食つた地獄鴉の……空君が一人……

「何で空君が此処に……」

「聞いて驚くな！私がここに居る理由は……理由……理屈なんて要らないーっ！」

「百や千の言葉……違う、それじゃ騷霊三姉妹ですよ」

……いや、別にいいですけど……能力が能力ですからねえ……？食事時にあまり見たくないというか……何というか……

「別にいいじゃないですか、彼女も天狗でしょう？」

いや、違うでしょう、鴉ですけど

「椀、残念ながら違うわ」

「ええっ！？違ったの！？」

「空君……せめて自分がどういう種族だったかぐらいは覚えてましょ  
うよ……」

「……人間？」

「背中に翼がある生物を人間とは呼びません」

「……鳥……」

「少なくとも鳥に手はありませんよ」

「……鳥人間！」

「夢に出てきそうですね、包丁で刺すと気が狂うんですか？」

以下、無限ループなので省きます

…医者＋動く核兵器移動中…

「いや、病院に来られても困るんですがねえ…」

「いいじゃん！いいじゃん！すげーじゃん！」

「クライマックスじゃ…それでは時間の波を捕まえてしまいますよ」

何故か院内にまで空君が付いてきた…正直…困る

「これじゃ…患者も寄り付きませんねえ…」

…いやあ…

「そうだ、どうせなら仕事を手伝って…無理ですね」

「待って、人の顔を見た瞬間に無理って言つのはどうかと思うよ」

絶対患者を激情させるだけですよ、この人…人じゃないですけど

「あ、あきらめんなよ！なんであきらめんだよそこで！もつと熱くなれよ！」

「核の熱は十分熱いのでいいですよ」

「あ、本当？えへへ」

今の褒め言葉に入るんですか…？

「というより、何故私に付いてくるんですかねえ…」

「んつとね…だって、井坂先生、私の姿見ても気味悪がらないし、能力も怖がらないし…」

ああ…そういうことですか…確かに、近寄りがたい外見ですよねえ…特に胸部の目が

「まあ、見慣れてますし、核融合だって…放射能を撒き散らしているなら怖いですが…制御できてるんでしょう？」

空君は、メスを珍しそうに見ていた

「…ん？何か言った？」

何だコイツ…解剖してやるのか…

空君は、メスを…口に運んで

「ちよつと、何故食そうと思ったんですか！？」

「んあ？え…だって、これ…人間が食べようとしてたし…」

「それはナイフであり、メスではない、そして何より、それはナイフではなく、ナイフで刺した物を食べようとしてるんですよ！」

「そーなのかー」

よかった、思いとどまってくれたようだ…

そんな時だ、来客が来たのは

「…おや、確か君は…」

黒と白のツートンカラーの服に魔女がよく被ってるような三角帽子、ウェーブのかかった金色の髪

「…魔理沙君、だったかな…」

私の中では、彼女は元氣すぎて困るイメージがあつたのですがね…

今の彼女は非常に落ち込んでいて、若干やつれている感じがする

「おや…相当疲れているようですねえ…」

「お前…探偵もやってるんだよな…？」

彼女は此方の声など聞こえてないような口調で言う

「…お願いだ…れいむ霊夢を…霊夢を助けてくれ…」

…霊夢君、たしか…巫女をやっていたような…

「あいつ…妙な奴にそそのかされて…」

以下略

要点だけまとめると

霊夢君が騙される

完全に心酔

身も心も捧げる寸前

なんと分かりやすい

「まあ…とりあえず言ってみますか…」

医者＋核＋魔女移動中…

到着…

霊夢君は見当たりませんが、魔理沙君がとりあえずおかしな点を教えると言ったので…付いていく

「まず最初…あいつ、妙な奴に信仰対象を変えてから、賽銭箱が初めて、もう入らなくなった、って言ってたんだ…でも…」

そっいいながら、魔理沙君は、賽銭箱のその部分をスライドさせる…と、中は見事に空だった…

「…もう中身を回収しただけじゃないの？」

「そうとも考えたけど…この間、霊夢に言ったら、何言ってるのよ、魔理沙の目は節穴なの？って真顔で言われたんだぜ…」  
それは…

「ん？誰かと思えば魔理沙じゃない！よく来たわね」  
向こう側から声を掛けられ、一同はそちらを向く

…と、青白い肌に銅色の鎧が所々にあり、顔から針が何本も突き出ている

「あれが…妙な奴、だぜ」

たしかに…妙ですね…

あれは…L I A Rのメモリ…

…とりあえず帰る振りをして、林に身を隠しましょうかね…

「じゃあ、あいつ倒して終わりでいいんじゃないの？」

「駄目ですよ、今、あの怪物は彼女にとって神です、攻撃でもしてみてください、彼女が本気で矛先を此方に向けて来ますよ」

「じゃあ…まずは…あいつから引き離さない…」

「方法ならありますよ、あの怪物…もといライアードーパント…奴の能力は…『嘘を信じ込ませる程度の能力』とでも言えばいいでしょうかね…一種の催眠術です」

…何かいいい手立ては…

「ビデオカメラとかあると楽なんですけどね…無いでしょうし…」

「ビデオカメラってあれでしょ？外の人間がエーブイって奴撮る時に使う…」



「間違ってますよ、君の知識は」

「というか、何故知っている」

「では…チャンスを待ちますかね…」

お約束通り、ウェザーに変身

何時も思っているんですが、この雷って草などに当たっても引火しないんですよね

『霊夢、今日も【賽銭箱の中には賽銭がたくさんある】ね』

今でしょう、私は即座にライアーが打ち出す針を雷で打ち落とす

『…？一円も入って無いわよ…？ん？神？貴方…本当に神？』

『な、何言ってるんだよ！【私は神】だよ！』

もう一度打ち出された針を打ち落とす

『いや…違う…あんたなんか神じゃない！ただのクズだ！…私を騙したわね…？覚悟しなさいよ…』

「おお、事件解決…簡単だったなあ…」

空君がメスをペン回しのように回しながら…って

「なんで持ってきてるんですか…」

「いや、護身用」

「君の場合…いらないでしょう」

右手の三本目の足を振り回したほうが効果あると思いますけどね

『畜生！失敗だ！どうする！？』

ライアー自体に対して戦闘能力は無いですし、あとは任せといって大丈夫でしょう

「さて…騙して悪いが仕事なんでな死んで貰うぜ」

…魔理沙君が隣で何かを言っていますね…まあ、大体予想は付いてましたけど…

「…分かっていましたよ、最初から…君なら私に頼らずとも、自力で何とかなると思ってましたからね…」

動機は分かりませんがね

まあ…マスタースパークなどに気を付ければ大した敵でも…

【TABOO！】

タブーだと！？幹部クラスのメモリを直挿し！？確かに魅力的ではありませんが…勝ち目は…？！

彼女は首元にメモリを挿す、すると、衣装が変化し、タブーの衣装のような形になる…

「やはり、超人態にはならないんですね…」

「あ、そうそう、それはスキマ妖怪が弄くつたからだそうだよ」

「何の為に…？」

「井坂先生のドーパント大好き症候群を発祥させないため」

「…ケツアルコアトルスは変わってましたよね？」

「ああ、あれは非売品」

非売品！？販売してるんですか…

それより、どうした物か…直挿しのタブーだなんて……ナスカの時のように限界点を越えませんかねえ…

そんな事を考えていると、魔理沙君は複数のエネルギー弾を連射してくる、私と空君は即座に神社前に出る

「全く…仕事を随分減らしてくれたじゃない…」

後ろからの声、…霊夢君も共犯か…！

【ZONE！】

ゾーン…9×9マスのゾーンボードを張り、狙った対象をボード上の狙ったマス目に瞬時に移動させるメモリ…

本来ならピラミッドに四本の足が生えた姿になるのですが…

右手に白い籠手…というか若干スリムになったゾーンドーパントがくっつく形になっている…

「行くわよ？魔理沙」

「あいよ、霊夢」

直後にゾーンはボードを張る

「え…ええ？何だよこの展開…」

ライアーは関係ない人物だったようだ…哀れな…

「相棒、これはチャンスだ…今、この場は乱戦になっている、博麗の巫女を討つことも可能だ…」

【HOPPER!】

何処からか現れた男がドーパントに…

「空君、超人態になってますよ？あの人」

「ああ、それはね、主要人物だけが一部変化で、ああいう雑魚は普通に变化する、っていうご都合主義設定が…」

「メタはやめましょう、メタは」

とりあえず、今、この場は五体のドーパントが居る…

「よし、私も使おうかなーメモリ」

【ARMS!】

空君の左手が随分前に空気だと思っていた鉄に…

「…全員ドーパント…」

凄い光景だ…

「魔理沙！さっさと片付けて私達の資金源を取り返すのよ！」

「了解だぜ！」

どうやら…最近、私の元に異変解決の申し出が来ますからねえ……村の人間にとつては、遠くて怪しい神社に住んでいる巫女よりも、すぐそばに居る強い医者のが話易いんでしょうねえ…

タブーが弾を乱射し、ゾーンがその弾を移転させ、全く読めない弾道を作る

「なるほど…これは厄介…」

「ハハハッ！嘔吐き野郎とバツタ野郎も一緒に消し飛ぶといいぜ！」

「…今…お前、俺を笑ったな…？」

向こうの雑魚二人組みが、妙な殺気を放っている、もう…私達帰ってもいいのでは…

「行くぜ、相棒…」

「勿論だよ、兄貴…！」

【HOPPER!】

二つ目のホッパーメモリですか…ホッパー兄弟とも呼びましょう

とりあえず、この戦いは…地味に後に響く戦いだったと…いいます

かねえ  
…

丁な白黒と乙な紅白／貧乏な巫女ほど危ない（前書き）

昨日…悪い夢を見たんです…

学園都市っていう場所に…

なんか法則を無視する人間が…

たしか…名前は…

とある物理の法則無視…だったような…

べ、別に宣伝なんかじゃないんだからねっ！勘違いしないでよねっ！

しよ、小説を読もうで検索しても出てくることなんて無いんだかねっ！

で…でも、

どうしてもアンタが検索したいっていうんわ何する文さんやmk

あwse drftgyふじこlp

## 丁な白黒と乙な紅白／貧乏な巫女ほど危ない

さて…非常に不味い事になりましたねえ…

とりあえず、あの二人の…コンビネーションが非常に高いせいで、避けるのに精一杯ですねえ…

「…空君、こんな時になんですが、君は何時も私と一緒に居ますけど…仕事とか大丈夫なんですか？」

「あー大丈夫、私が居なくても間欠泉から出る水の温度が下がるだけだから」

…そういう問題…なんでしようねえ…

「そうかそうか、つまり…そういうことだったのね…昨日温泉に浸かろうとしたら異常に冷たくて一日中毛布に包まってガクガク震えることになった理由はあ！」

「怒ってますよ、空君、謝ってください！激情して攻撃が激しくなる前に！」

「え？え？なんて言えば…」

「正直に言って下さい！」

「ざ、ざまあみる！ばーか！腋巫女！貧乳！幸薄！性悪！金の亡者！」

「たしかに正直ですけどぉ！」

「よし、魔理沙、見るも無残な姿になるまで攻撃し続けるわよ」

「了解だぜ」

ブランド所謂ピンチって奴ですねえ…どうしたものか…

「駄目だ…空君！謝ってください！」

「え？また？なんて言えば…」

「霊夢君は聞く耳を持たないでしょうから…魔理沙君に素直に言うて下さい！」

「え？…何無駄な努力続けてるの？無駄無駄無駄、努力したってそんな火力しか出ないんじゃない、一生掛かっても私に追い付く事は無い

ね、というより火力重視は二人も要らないし、というかそのマスタースパーク？それ、他人の真似事でしょ？自分で大した火力も出せないくせに…よく『弾幕はパワーだぜ！』とか言えるものだね？実（以下略）

「確かに素直…ああもう、君に頼った私が馬鹿でした！」

「…もう…駄目だ…死のう…」

「お前も…一緒に地獄へ落ちよう…」

「じゃあ、俺の妹だね！」

「「我等は地獄兄弟！」」「」

「長男！矢車想！」

「次男！影山瞬！」

「長女！霧雨魔理沙！」

妙なチームが結成された…！？

「お前も…このホッパ―メモリを…」

「気持ち悪いから嫌だぜ」

「……………兄貴、諦めよう」

「畜生…」

解散速過ぎるでしょう…

「…しかし、タブー…衣装だけになったとはいえ…魅力できですね…」

「んん？そう言われて見れば、胸元を強調してるね、あの衣装…大した大きさも無いのにさあ、ハハハ」

「霊夢、消し飛ばすぜ、細胞の一つも残さず…！」

「勿論よ」

だめだこの空…はやく何とかしないと…

「ん？魅力的…？井坂先生、ああいう衣装が好み？」

「いえ…私の言っている事は、容姿ではなく…能力がですね…」

「よし、殺してでも奪い取ろう、あれなら井坂先生も私に振り向いてくれるはず」

「聞けやコラ」

とりあえず少し落ち着きましょうよ…

「兄貴…俺は新しい地獄を知ってしまった…空気、という地獄を…」  
「相棒…俺達はずうっと一緒だ…」

「我が魂、ZECTと共にありいいいい！！…違う」  
「ホッパ―兄弟は、メモリを投げ捨て、階段を飛び降りる…」

自殺…？…え？何で？

「……自殺……」

「自殺、だな」

「自殺かあ……」

『うわあ！神社から死体が！…やっぱりお参りするのなんてやめようよ！』

『馬鹿！そんなんじやお父さんの病氣治らないよ！』

『医者に頼めばいいじゃん！』

『お父さんを負ぶってあんな恐ろしい竹の林抜けられないわよ！』

『違うよ！村に井坂医院って凄腕の医者が居るんだよ！』

『そうなの…？だったらお参りする必要なないわね！このお賽銭も診察代に回そう！』

『うん！そうしましょ！そうしましょ！そうしましょったら、そうしましょ！』

『オラこんな神社嫌だ』　オラこんな神社嫌だ』　井坂医院に行くだ』　『』

…客一名追加つと…

「…もはや弾幕で追い詰めて殺すなど生ぬるい！塵になれい！」

「それは私の台詞ですよ！魔理沙君！」

人の台詞まで持っていくとは…恐るべし、盗難癖

「…いや…もういいわ、魔理沙…諦めましょう」

「…Why！？何故ベストを尽くさないのか！」

「…やっぱり、信用できない神よりも、信用できる医学のが…信じられるのよ…」

「…じゃあ、これからどうするんだ！？知ってるんだぜ！霊夢！昨



日、泥食ってたんだろう!？」

…極限状態じゃないですか…

「ダンボール…茹でて…塩を掛けて食べる…これが…私の朝食」  
不味い、かなり不味い

「柱、削って…茹でて…塩を掛けて食べる…これが…私の昼食」

…いやいや、なんでも塩かけて茹でればいいって物じゃ…

「泥…塩掛けて食べる……たまに蟻、これが…私の夜食」

…だめだ、何か救済処置は無いのか…?!

「…日曜は…豪勢に…野鳥を…弾幕で打ち落とす…焼いて…いや、生で…」

「れ、霊夢君!ビジネスです!ビジネスしましょう!」

「…たまに来る来訪者を…かゆ…ん?ビジネス?」

「そ、そうです、これから一ヶ月ごとに、売り上げの2/3を持つてくるので、まともな食事を取ってください!あ、あと手に入れたガイアメモリは全て私に渡してください」

「無論、OKよ、断る道理が無いわ」

…交渉成立…

これにより…私は、ガイアメモリを時々手に入れられるようになったわけで…

**丁な白黒と乙な紅白／貧乏な巫女ほど危ない（後書き）**

最近、夢を見るんです、空さんと、井坂先生が、イチャついて…そのまま……ね？  
末期でしょうか？

〇は法則に従わない／医者 井坂（前書き）

今回、空気使いさんの小説、とある物質の法則無視とクロスオーバーさせていただきました

私の弱小、趣味全開な小説とはまったく違いとても、まともな小説なので、是非、御覧になってください、とても面白いです

とか言いましたけど、実質、空気使いさんとは、実際に何度も交流（not 性的）していて、言わば友人なんで、そこまで持ち上げる必要はないんですけどね、

まあ、ありじゃないか？貴様程度で感覚で見てください

〇は法則に従わない／医者 井坂

あれから…色々な事がありました…

まだ三週間しか経って居ないのに…五年ぐらい過ごしている感じがしましたよ…

まず最初に…文君が…何処からか、蓬萊の薬を持ってきて…無理矢理…

私は…

「待ってください、人の命は制限があるからこそ、儂く美しい物なんです…」

と、言いましたが…

「貴方が死んだら誰が私の朝食を作るんですか！」  
と、怒られて…無理矢理…

…もしかして、既に感覚が狂っているのか…？本当に五年経っているのか…？

いや、霊夢君の姿に変化が無いから大丈夫だ…多分

…なんて事を、考えながら…朝食を作ろうと…部屋に入ったら…

「……何かいい事でもあったんですか？」

むっっちゃ翼をバツバツさせている文君

「特ダネですよ！特ダネ！」

「そうですか…」

どうせまともな物では無いんでしょうけどね…

『須藤霧彦！ついにスカーレット姉妹と重婚！』

……Why？

『尚、今回でたくご結婚なさったスカーレット・S・霧彦さんにお話を聞いた所』

『もう、ロリコンとでも何とでも行ってくれ、だが、私は一つだけ言える！私は幸せの絶頂を迎えていると！合法だ！見た目十歳以下でも二十歳以上だから合法だ！私をそんな目で見るなああああ

「！！【N A S K A！】消える消える消える……！！」

『と、大変発狂しているようでしたが、その場に居合わせた従者の十六夜さんによって取り押さえられましたその際に……』

『離せ！私は霧彦だぞ！』

『などと、再び発狂しており……』

…

もうだめだ、あの霧彦…

「…いや、特ダネですけどねえ……ハハハ…笑うしか無い…」

一方、風都では…

「若菜、お前にプレゼントだ…」

「？何ですか？お父様」

「これだ…これこそ…女王の証だよ…」

「この光は…」

ゴットファザーとその娘はアタッシュケースを開け、中に入っている緑色の物質を眺める…

「あら、面白そうね、それ」

そして、アタッシュケースは消え、代わりに奇妙な服装をした、金髪の女性が現れる…（女性であり、少女ではない、これが示す事は…！）八雲紫だ

「あなた…！少し調子に乗りすぎじゃない！？」

「あら、私と戦うとでも？今の貴女はただの人間よ？」

「…若菜、仕方が無い、実は…あれ、複製が何個もあるのだよ」

「…ええ？女王の証なのに…」

「細かい事は気にするな…」

親子が会話で盛り上がっている所に、紫が茶々を入れる

「でも…あちらには、GENEを操れる人物が居ないのよねえ…」

「ハッハッハ…それは残念だな…あれは、ジーンのメモリを使用できる者が居なければ、活用出来ないからな…」

「…そういえば…前にちよつとだけ覗いた世界に…居たわね、そ

れが可能な人間が…」

その一言を言い、彼女は消えた…スキマの中へと…

「…お父様…あの女…速く手を打ったほうが…」

「安心したまえ、既に手は打ってあるさ…」

そして幻想郷

「…空君、駄目ですって、いや、駄目ですって、無理ですよ」

「…ええ？似合ってるじゃない…」

「いや、似合っている以前に…核融合する人をね？病院内をうろつかせるという事事態に無理が…」

もう嫌だ…病院に着てみれば、赤と青の奇妙なカラーリングのナース服を来た空君が…

（言えない、鳥頭の馬鹿を病院で働かせるのは無理だ、なんて…）

（言えない、この服を貰って着ていたいから働かせてくれなんて…）

「とりあえず無理ですよ、無理無理、なんで頑張るんだそこで、諦めろよ」

「なんで諦めるんだよそこで！」

（畜生…食い下がるな…患者にタミフルでも間違って渡したらどうするんですか…）

（畜生…粘るな…私のナース姿なんて、そこらの人間なら『眼福じやー！』とか言ってOK出すのに…）

「…無理ですって」

「無理じゃないって」

「無理ですよ」

「無理言っな！」

「無理！」

「あきらめんなよ！」

「君は院内に居るには熱すぎる！」

「調度いいですよ！」

「大体なんですか！？その服の色！？不健康でしょう！」

「け、血液を表現しているんだよ！多分！」

…多分で…

「…ああ、もういいですよ…ただし、接客のみですからね、薬品類は触らせませんよ」

「え？別にいいよ」

いいんですか…何をするんだ…一体…

…場面を変え、とある少年の話へ

夜道を歩く、一人の少年の姿があつた、年頃は高校一年生ほどだが、驚くほど飾り気が無く、髪も、整えた様子が無く、服も学校指定の夏服を着用している

「暑い…いや、異常気象すぎる！もう11月なのに…おま…33

つて！ふざけてやがる！」

少年は、独り言を呟く、いや、叫ぶ、このあたり、少々気がふれている事が伺える

【ppppp!】

少年の携帯が鳴り出す、此方もまた飾り気が全く無く、もう青春を何処に置いてきた、といった感じた

携帯の画面には、かつて彼を絶望の淵から救い出した友人（または厄介者）の名前が映っていた

かぜなみ まこと

【風波聖徒】

「もしも『You！早く【兄貴塩】or【弟味噌】を買って来るんだ！早く！459個限定販売だ！いいか！絶対買うんだ！買えなければお前は明日からチョコークの粉を食う生活が始まる…！』…分かった…」

彼は自分で買いに行けよ、そして、お前、カップラーメン以外も食えよ…という言葉を叫びたくなつたが、余計暑くなりそうだから…という思いが彼を止めた

「…自分で行けよ！」

無理だった

『無理だ！俺は今…あの憎たらしい教師…慧音を滅する事に夢中な【ピチューン】ホアアアア！』

「また東方か」

最近、風波は東方Projectという同人ゲームに夢中になっていた、そのゲームは、幻想郷というところで起きる異変を巫女さんと普通の魔法使いが解決するという、シンプルな物だが、キャラクターは個性的で、音楽も素晴らしく、独特な絵は恋心さえ攪る（by 風波）ゲームだ

『…畜生…！畜生…！もつこたんに近づく奴は全て俺が消し炭にしてやる…！』

「慧音、普通にいい奴じゃないか」

『俺は教師という生物が嫌いなんだ！それと面倒事も嫌いなんだ！』  
「…まあ、教師が嫌いなのは分かるぞ…お前、教師から嫌がられたんだっけ？」

『たかが…窓を全て割ったぐらいで…』

「お前が悪いんじゃないか！」

『うるさいうるさい【ピチューン】Noooo！！もつこたん！何故君は俺に牙を向ける！？』

そういうゲームだからだろう…と言いたくなる気持ちを抑える

「お前ってさ、妹紅が好きだったんだっけ？」

『ああ、五番目にな』

「上から順に言ってみろ」

『お空ちゃん、あやや、フランちゃん、るみゃ、もつこたん』

「…慧音は？」

『伊藤誠より嫌いだ』

相当だな、と彼は思いながらも、兄貴塩、弟味噌をカートに突っ込む、会話しながらも着実に任務を遂行する、完全任務、パーフェクトミッションだ！（by 白い矢車隊長）



『そついやさーお前は誰がお気に入りよ？』

「ん、妖夢<sup>ひようむ</sup>」

『こんのロリコンが！』

「うるせえ、フランとルーミアが選択肢に入っているお前にだけは言われたくない」

『おまつ…！フランちゃん馬鹿にすんなや！このフランチック高校生が！』

「悪い、それもお前にだけは言われたくない、クレイジーニート」

『ええい！妖夢も死ねい！幽々子様は俺の物だ！』

「…貴様、後で覚えている…見るも無残な姿へと進化<sup>シフト</sup>させてやろう…」

『黙れ黙れ黙れ！お前は睡眠薬の飲み過ぎで死ね！お前はもつこたんに焼かれて死ね！死ね！死ね！死んでしまえ！うわあああああ！！』

駄目だ…このニート…早くなんとかしないと…

などと考えながら、レジへ向かい、支払いを済ませる

「兄貴塩と弟味噌買ったから今から帰るわ」

『…今さ妖夢の1/16フィギュアが届いたんだが…お前のか…』

「見るな！待つてろ、今すぐ貴様を鳥目にしてやるからな！今日から夜は目が見えなくなるよ！」

『…ヒヤハッ…！いい事考えた…！圧力鍋で揚げてやるぜえ…！ヒヤはハハははハハハ…！』

「や…やめろ…そんな事…！」

『想像してみろよ…！圧力鍋でじっくり揚げられながら…！』熱い！熱い！』ともがき苦しむ妖夢の姿をよお…！……アへ顔で』

「何でだよ！主に最後、何でだよ！ありえないだろ！」

『…やべえ、興奮してきた、よっしゃ、今すぐ圧力鍋で揚げてくる！ヒヤッホーイー！眼福じゃあー！』

「…馬鹿な奴だ、俺には切り札がある…！1/16藤原妹紅フィギュア…！あれを俺は隠し持っている…！」

『何！？そいつは何処にあるんだ！？言え！』

「…では、大人しく…妖夢フィギュアを俺のPCのデスクトップの隣に置くんた……」

『クッ…いいだろう…』

そういいながら、彼は玄関を開ける、風波の家は異常に大きく、部屋までかなりある

『おまえ、デスクトップ…妖夢じゃん、…うわ、マウスカーソルも妖夢じゃん…おい、画像フォルダ、全部妖夢じゃん、…トップシークレット？…パスが必要か…【YOU MU】…開いたよ！馬鹿か！？…中身…全部妖夢じゃねえか！…』

「貴様…！」

『三角木馬に乗る妖夢…蠟燭妖夢…水攻め妖夢…監禁妖夢…スク水妖夢…うわぁ…』

「別にいいだろ！全部自作だ！」

『自作かよ！絵え上手ッ…！』

「…そうそう、その中にあるファイルの中身見てみる…」

『俺と妖夢と（都合により自主規制）…同人誌だと…！？これもまさか…』

「自作、だ」

『うつわ！お前これなんて実写！？ねえ！！なんて実写！？うつわ…お前…やりすぎ…』

そして、彼は自室のドアを開ける

「あ…お、お帰り ご飯にする？お風呂にする？それとも…俺？」

「小便はすませたか？」

神様にお祈りは？

部屋の隅でガタガタふるえて命乞いをする心の準備はOK？」

「…畜生！この野郎が！」

「逆ギレ！？」

「逆ギレのがつえーんだよ！」

「何処の自衛隊？！」

「神風：見せてやるよお！！」

「だから何処の自衛隊だよ！」

「俺の上腕二頭筋が真っ赤に燃える！勝利を掴めと轟き叫ぶ！ばあくねつ！ゴッドお！！フィンガー！！！！」

「違え、いろいろと、違う…！だがしかし…！貴様に言う事がある…！」

彼は、一度深呼吸し、何処からか青い薔薇を取り出し、台詞を言う  
「薔薇は最も美しく最も強い者のために咲きます。だから私は闘うのです」

「何処の黄金のライダーだ！」

「君の血が吸いたいと薔薇が言っています」

「俺の血は緑色だぜ？」

「アンデットか！」

「そして、私は美味しい人間だぜ！」

「魔法使いか！ええい！先手必勝！」

彼は、急に風波に殴りかかる

「うわっ！卑怯な！必殺！妖夢ガード（妖夢フィギュアを目の前に）  
！」

「お前のが卑怯だ！」

「卑怯もラッキョウも大好物だぜえーッ！！」

「蟹刑事…！！」

「…見るよ…！このフィギュアの首が折れそうだぜえ…？クハハハハハ！！」

「やめろ！やめてくれえ！」

「考えてみるよ…首を折られそうになって…苦しがる妖夢の姿を…  
…アクメ顔で」

「だから何でだよ！」

そっぴいながら、彼は、もう一度殴りかかる…が、その拳は届かなかった

何故なら…下に落ちたからだ…

「…？え？何処に…？まさか…え？げ…幻想…入…り？」

風波は、がつくりと膝を付く

「…ス…スキマババアアアアアアア…！！グハッ

！？これは…花瓶！？だ…駄目だ…出血量が多すぎる…」

この後、井坂深紅郎と、【彼】が運命的な出会いをするのは言いつまでもない…

〇は法則に従わない／医者 井坂（後書き）

え…？性格が違つて？気にしない、気にしない、多分あつてゐる、  
80%あつてゐる、というより、井坂先生空気がすぎだろ…jk…

## 〇は法則に従わないノスキマババアにレクイエムを（前書き）

スキマババア、彼女の事も…たまにでいいですから…思い出してあげてください…

途中、空気使いさんの書いた文章があります、探してみてください！  
…ちなみに、三部構成です、サーセンwwwwww

## 〇は法則に従わないノスキマババアにレクイエムを

朦朧としていた意識が覚醒（not 剣<sup>フレイド</sup>）してくる

「知らない天上だ……違う、天井だ……天井？違う……天井……待て、落ち着け……素数を数えろ……1、3、5、6、7……違う、それは奇数……でもない！ならば……なんだ？」

少々、混乱しすぎている、風波の家……和室<sup>アイツ</sup>なんてあったけ……？いや、ない……ダンシングルームはあっても……和室はない……

ならば……此処は……何処だ？……そうか、夢か、夢だな、こいつは夢だ、耳を抓ったら痛いけど……夢だ

「痛い……あれ？夢じゃない？って言うか……耳が無い……！」

これは緊急事態だ、はやくバンドエイドを……、だれかヘルプミー……ミナサンガンダムサイコウツス

ファクウレール癌食べたい

……、今、別の作者が憑依した……！？違う……俺は……何を言っているんだ……！？

「……耳は、ある………うん、狐耳？……あれ？大丈夫ですか？九尾の狐のコスプレなんかして……Why？」

気が付けば……俺の目の前には……コスプレ好き（仮名）な変態さんが立っていた……

「……（なんなんだ、この人間……紫様も妙な奴を連れてくる……）」

「……みよん？みよん、Oh！ミヨン！Oh！Nice！みよおおおん……！」

思わず口走ってしまった……若干引かれている、そりゃ、自分だって少し引いているぐらいだ、普通引くだろう

……あの人……よく見れば……東方の……八雲……藍……に……似て……似……酷似している……

「失礼な事をお聞きしますが、貴女は……コスプレイ………八雲、藍さんですか……？」

「…（話したくないなあ…）そうだが…」

絶対今、話したくないとか思われたよ、絶対

…待てよ？幻想入りか？幻想入りなのか？そんな馬鹿な…！

「…じゃあ…此処は…マヨヒガ？」

「そうだが？」

なんてこった！最悪のパターンの一つじゃないか！…もつとも最悪なルーミアの目の前パターンは避けられたが…！！これじゃあ…いつ、俺の理性がぶっ飛ぶか…分かったもんじゃない！

得策は…！！逃げ出すこと！

「お世話になりました！親孝行出来なくてすみません…！」

俺は即座に脱兎のごとく逃げ出した

「あ、待て！脱走者だ！であえ！であえ！」

「何をやってるの！藍、橙、目標を確実に捕らえるのよ！」

「了解！」

と、幼い声だから恐らく橙

「了解！」

と、大人びた声だから、恐らく藍

「振り切るぜ！貴様らに俺の能力を教えてやる！絶対逃亡だ！」  
エスケープ

即座に、隣から、橙がシザースアタックを仕掛けてくる、即座に俺は、空気の壁を作成し、はじき返す

「痛ッ！空気なのに痛い！痛いやらんしゃまあああ…！」

「ちえええええん！！瘤ができてるじゃないか！！畜生！今死ぬ！すぐ死ぬ！骨まで砕けるお…！」

逆上…だと…！？じょ…冗談じゃ…！こんなときに…

『干>手こずっているようだな、尻を貸そう』

とか来ればいいのになあ…！！

「よっしゃ！あとは門を打ち破れば…！！」

「騙して悪いが境界が張られている！外に出る事は出来ない！」

「俺に！突き破れない！壁はねえええええ…！」

境界だつて物質だ！俺は即座にい、クツキーより脆く想像し、サイ



コ ラッシャーを決める！

これからは…！俺が ンダムだ！（錯乱中）

病院内

…思ったより、空君が働いてくれますねえ…特に、男性客への受け  
（not！性的！）がいい…

「次の方どうぞー」

…空君の声だ、わりと、まともに仕事をしている…

「よお、井坂先生…いい嫁さんを貰ったなあ…えらいべっぴんさん  
じゃないか！」

「…はあ、違いますよ、彼女はアルバイトです…いえ、手伝いと言  
いますか…」

「なんだ…違うのか…」

一瞬、がっかりして、次の瞬間にこんな事を言った

「じゃあ、俺が貰ってもいいって事か？」

「やめときましよう、彼女、軽く人の一人や二人は焼き殺しますよ」  
その一言に、男性の顔から笑みが消える、やっぱり妖怪ですしね、  
信憑性があるんでしょう

そんな事を言っていると、突如ドアが開いた

「井坂先生、急患だつてよ、名前は…かぜな…違った御神光みかみあきだよ」

「だ、そうです、悪いですが、後でもう一度診察しますよ」

「そうか…残念だなあ…」

男性が外に出て行き、代わりに、夏服来た、高校一年生が出現した…

「…俺…俺…幻想入りして…狐に…追い掛け回されて…」

「分かりました、精神安定剤を出しておきましょう」

「普段から服用しているよ！！」

「そうですか、では量を増やしましょう」

「とりあえず話を聞いてくれよ！」

…少年説明中…

「なるほど、起きたら藍だったと」

「そう言う事です…なあお願いだよ！元の世界に返してくれよ！」

「何故、私の所に…？」

「村人に話を聞いたら…みんな…『井坂先生がなんとかしてくれるよ！』『井坂先生が居れば…この村の将来は安泰だ！』としか言わないんだ…」

なるほど、私は崇められているようですね…（後の風神である…ふうふう爺さんではない）

「まあ…最も速いのは…霊夢君に話を付ける事でしょうね…行きましようか…」

少年&amp;mp・医者移動中…

『メイド！ニーソ！PAD長！メイド！ニーソ！PAD長！』

盛り上がっている、主に…霧彦君と、レミリア君の歌で…

『もういやだ…このお嬢様と…ご主人様…』

そして、端で紅魔館のメイド長の…十六夜咲夜君いざよひさくやが泣いていた

あまりにも可愛そうなので、五十円をあげて泣くな、と言ったら、

『貴方まで…馬鹿にするんですか？』

ナイフを投げられた…何故だろう…

「…どうしますか？」

「待つてください、この肝臓に刺さったナイフが抜けないんです…」

「それ、死にますよ」

「私は不死身の体を持っている、その証拠に今まで一度も死んだ事が…一度しか死んだ事が無い…」

「既に死亡済み！？」

「おっと、抜けた（not 性的）抜けた（not 性的）」

少々、痛いですが、問題はありませんかえ…

「で、どうするんですか？」

「…そうですね… スキマ妖怪に殴りこみにも行きますか？」

「いいですね、それ、簡略的、かつ効率的、でも…どうやって…？」  
「これを読んでください…」

私は、紙切れを渡す

「（何処から取り出した…？）…えつと…スキマババーツ！！少女臭？？馬鹿馬鹿しい！！てめえから臭って来るのは加 「分かったわ、そこまで死にたいのなら殺してあげるわ」 うわああああ！！スキマババーアだあああ！！」

召還に成功したようですねえ…

「よし、行きますよ… ええと…光君…？」

「…や、やってやる！やってやるさ！」

「悪いけど… 貴方をまだ帰す訳にはいかないわ…私の崇高な目的の為に…幻想郷（こゝろ）を守るためにも…！！」

科学と医学が交差する時…物語が始まら……ない！！

〇は法則に従わないノスキマババアにレクイエムを（後書き）

この物語は…つまり……ない！！

スキマババアは…嫌い……ではない！！

慧音も…嫌い……ではない！！

影山も…嫌い……ではない！！

矢車も…嫌い……ではない！！

ただし、草加、てめーは駄目だ

## Wよ…永遠に／平行世界（前書き）

今回はクソマジメに行きました、所謂シリアスって奴です（not  
シリアル）

…ああいうクソマジメな奴が損をするんだ！そんな世の中でいいの  
か！？

そいつらを殺せ！撃てえーっ！

父親を殺しておいて…馬鹿を見たで済ませるのか！？こいつは殺さ  
ないと…駄目だぁーッ！！（以下略）

題名は違いますが、一応前回から続いております、ご注意を

## Wよ…永遠に/平行世界

幻想郷を守るためにも、ですか…

「幻想郷を守るため…?」

光君がそんな事を言う、確かに気になりますがね…貴方が聞いても答えないと…

「…私は見てしまったのよ、此処に限りなく近い、けれど同じではない世界で…妙な泥人形が…幻想郷を壊すのを…」

…ええ、答えると思ってましたよ? 最初から…

「…で、何で俺を…」

怪訝な顔をして、光君が問う

「…この妙な物体、有機情報制御器官試作体<ガイアプログレッサー>…って言うんだけど…」

「え…? 何…? 対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース?」

「そんなユニークな物じゃ無いわよ…」

ユニーク(笑)

「…で、それを俺にどうしろと…?」

「これを私の遺伝子に組み込んでもらうわ、貴方の法則無視<sup>オーバーライン</sup>でね?」  
法則無視…? 付いて行けない…ハイレベルすぎる…

「…そんな事出来るのか?」

「出来るわよ、貴方の能力、大まかにイメージしただけで、細かいところまで設定できるから…【ガイアプログレッサー】八雲紫の遺伝子」というイメージだけで完成よ」

…なるほど、しかし

「…それは、どのような物質なんですかねえ?」

「地球の記憶、無限アーカイブとの接続を可能にするわ、…時期が経てば、【運命の子】と同等の能力を得る事さえ可能」

紫が得意気に話す

「そうですか…しかし、それは貴女には不可能でしょう…」

「……」

「…此处からは、私の推測ですが…恐らく、泥人形とは、園咲若菜の【CLAYDOLL】…通常の間人ならば、許容範囲を遥かに超える地球の記憶、そのデータ量全て…許容範囲を超えたとしても…その尋常じゃない回復力で、回復するのではなく、自分を適する形に【作り変える】…違いますか？」

「…そうね、合ってるわ、でも私は人間ではない、【妖怪】よ」

「しかし、それほどの回復力はない、そうでしょう？」

「…それでも、私が…遺伝子に組み込まなければ誰が組み込むのよ…？」

八雲紫は若干イラついたように問いかけてくる

ここで、皆さん思い出して欲しい…私は今、人間だろうか？

違う、蓬莱人だ

「私ですよ、私は既に人間でなく、蓬莱人ですからねえ…」

蓬莱人の回復力を色々と実験してみたんですけどね…（主に妹紅君を実験台にして…実験の内容？電磁パルスを神経に直接流し込んだり（多少、表現不可の自体が起きて、妹紅君に新しい性癖が生まれる所でした）、焼け傷への回復速度（中々焼けずに、苦労しました）、放射能を浴びた場合に回復力が低下するかどうかの実験（実験場所選びに時間が掛かりました）…いいデータが取れm、うわ、貴方達、土足で上がrなにsくぁwse drftgyふじこ1p）最低でも0.005秒、その間には完全に回復する事が判明しました、クレイドルの回復時間は、私のデータ収集時と変わって無ければ0.02、蓬莱人のが圧倒的に速いですしね、行けるでしょう

「…では、頼みますよ、光君」

「ちょ、ちよつと…！」

紫？君が止めに入る

「何時でもいけるけどさあ…」

「では、なるべく早いほうがいい、早速始めましょう

一方風都では…

「お父様、対抗策というのは…」

父親と娘の会話、それは誰も入り込めない空間である

「何、簡単な事さ…この世界にガイアメモリが無ければ、他の世界から持ってこればいい、いや、来るのを待つ、という表現のが正しいかな」

直後に、空間を絵の具で塗りつぶしたように、赤の文字が並んでいる奇妙な空間が開き、中から四m半はあるであろう、怪物が姿を現す…

「…！？お父様…これは…！？」

「ッハッハッハ…若菜、お前の真の姿だよ、クレイドールエクストリーム……」

そして、怪物が姿を人間に戻す、それは…園咲若菜だった

「申し訳ないですわ、お父様、あちら側ではガイアプログラッサーの開発が遅れていましたの、【左翔太郎】がエクストリームに結局適合できず、Wがエクストリームへと変身できなく、データ採取が進まなかったんですわ」

「そうか、しかし、無事ならばそれでいい…」

「お、お父様？これは…」

突如現れたもう一人の自分に娘は戸惑う

「安心しろ、若菜…お前を殺したりなどはしないさ…ただ、彼女には幻想郷からメモリを持って来てもらうだけだ…」

「そう言う事よ、ふふふ…違う世界の人間は、違う世界の自分に危害などを加えてはいけない…でしたっけ？」

「おや、そこまで話が進んでいたのか…あちらの私は相当気が早いようだ…ハッハッハ…」

娘は思う



理解できないから怖い  
理解できないから恐れる  
ならば、全て受け入れよう、と

そして幻想郷へ

「…本当に成功したの？」

「ええ、成功しましたよ？今、馴染んでいる所です」

「そろそろ帰らせてくださーい」

作業はあっさりと終わった、えい、の一言で終わりですよ、なんと  
呆気も無い…

「ええ？ああ、帰っていいわよ…」

「…一目、妖夢を見たかったが…仕方が無い…まあ、風波アイツに自慢ぐ  
らいは出来るだろ…」

即座に足元にスキマが開き、落ちていく光君、よく分かりませんで  
したが…

能力、とか持つてるんですかねえ…？

惜しい事をしたかもしれません…

「…で、この世界にも泥人形が来る可能性は？」

「恐らく100%、ガイアメモリ盗んだし」

「何故盗んだし」

「聞かないでくれるかしら？」

…異常に怖い…！

などと言っていたら

「あらあら、随分と余裕なのね？」

神社の階段を登ってくる一人の女性…あれは…

「園咲（井坂）若菜（深紅郎）！？何故此处に…！？」

『やめて～ください～』

『よいで～はないか～？』

駄目だ、不釣合いすぎる、後ろの歌が

『PADを外して素直になれ!』

少し黙って欲しいってか、咲夜君、吹っ切れて一緒に歌ってますよ、何やってんですか…

「……………」

「……………」

「姉を狂わせた…あなただけは許さない…!!【CLAYDOLL!】」

「…違いますよ、促進させただけですよ、【WE…】ちょ、バグってますよ!【WE…】お、おま…こんな時に…【WEYYYYY!】ウエイ…って何ですかウエイ…って、【WEATHER!】直った…」

若菜君は、前の姿とは違い、四m半はある、巨大な姿へと変わる…

「…!?なるほど、クレイドール…エクストリームという事ですか…紫君、あちらの馬鹿騒ぎしている馬鹿共を非難…違っ、避難させてください」

「分かったわよ…」

さて、私の姿は…

何も変わらない  
変わらない

「キブンガ…イイ…」

あちらのクレイドールエクストリーム…ゲームセンターではない以下CX

は、相当ハイなようで、多数の重力弾を連射してくる…

「と言うより…ガイアメモリと一体化しているから人間化は不可能なんじゃ…?」

「…ガイアメモリ…ガイアプログレッサーヲ…テキゴウシタカラ…」

ああ、そうですか、っていうか何気にちゃんと答えてくれる、いい人じゃないですかね?

とりあえず、私は重力弾を避ける、いや、だって、日頃から核の弾幕避けてれば…こんなの…

「…コネクト」

コネクト？連結？一体何を…

と、思っていたら、重力弾が私に集まってきた…

回避不可能じゃないか…？

そうだ、これは弾幕ごっこじゃないから…回避できなくても別に…

誤算すぎる

直後に潰れる体中

右手、右足、むしろ全身

「オワツタ…テゴタエノナイ…」

……医者修正中…

気が付けば、私は痛覚が崩壊していました、驚きですね

…私が、人間体に戻るのには、人間体の時に適合したからですよ？

あ、普通の人間では無理ですけどね

私は、蓬莱人ですから

「…エエエクストリイイイムウ…！」

一度言ってみたかった台詞を叫ぶ、だって…言いたくないですか？

この台詞…

私の新しい姿は、

体は蜃気楼のように揺らめき、それを冷気で凍らせている感じで、

目は太陽のように光り…って、まあ、体中が天気だと思って下さい

犬…違う、これは天照大御神ですかねえ…風神 天照大御神

なんと分かり易い…！！

「キ…キブンガ…あまりよくないですよ！！気持ち悪いっ！四つん

這いに違和感がありまする！」

あ、まともに喋れますね

良かった…

戦闘中に

【キブンガイイ…】

【キブンガイイ…】

これだけだったら怖すぎますものね、…落ち着こつ

私の…最後の戦いが…始まる……いや、  
始まりますよ？始まら……な  
い……っていうオチはありませんから

## Wよ…永遠に／平行世界（後書き）

次回…（第一部）最終回！！

…いや、この小説に第一部も何も無いですけどね、多少変わるとすれば、

戦闘が全く無くなる程度です、ハイ

Wよ…永遠に/Sinkurou Isaka(前書き)

便利な単語登録機能、これで東方の出にくい名前を登録すると非常に便利なのですが…

変換ミスが酷いことになるんですよ

お前もこうしてやる！

お前妹紅してやる！

もっこもっこにしゝてやんよゝ

すみません、謝ります

すみません、文まります

反省の色全く無し

今から行くよゝ

今から衣玖よゝ

空気でも読むんですかね

イメチェンした？

イメ橙した？

コスプレですね、分かります

以上の事を踏まえ、計年収

以上の事を踏まえ、慧音んしゅう

ある意味年収より欲しいかもしれない…

すみませんでした、神に命を返してきます

…

橘咲也、仮面ライダーギヤレンだ

橘咲夜、仮面（PAD的な意味で）ライダーギヤ「うわすみません  
でした文まりmくぁwせdrftgyふじこlp

…おまけ…

「さぁ、検索を始めよう…キーワードは…スキマババア」  
ヒュン、ヒュンヒュン、ゴスッ…

その後、フィリップの意識は戻らなかった…

劇中で、マジメにあの本棚がフィリップに当たらないのが不思議で  
す

## Wよ…永遠に / Sinkurou Isaka

CXは重力弾を乱射し、私は屋気楼を作り、避ける  
先ほどからこれの繰り返しだ…

一応、無限アーカイブに接続し、倒す方法を探してはいるんですけどね…

見つからない、向こうも同じでしょう、恐らく見つからないのです、私の倒し方が…

それだから、相変わらず重力弾を乱射するだけ…

飛んできた弾が…神社に…

「あ（ア）…」

物凄い音を立てて、崩れる神社…

「……じ…神社が…私の神社が……許さん…許さんぞお！五体バラバラに切り刻んで宴会の料理に出してやるよお！！今死ぬ！ここで死ぬ！骨まで碎けるお！！」

「ま、待ちなさい霊夢！」

怒りに身を任せ、走ってくる霊夢君……ん？キーワードを変更してみましよう…

ユーザーエクストリーム

【WX 博麗の巫女 CX 撃破】

…ヒットした！

「霊夢君、しばらくでいいので、CXの再生能力を封印してください」

「ええ、今なら何でもするわよ、神社を壊した罪は重い…！」  
そこまで信仰心が…

「修理費が物凄いじゃないのよ！？」

全く無かった

「では、一、二、三、で行きますよ…一、二、三！」

直後に、クレイドルの動きが止まる、いや、再生能力を抑えられ、データを貯蓄出来なくなり、自壊し始めている、無限アーカイブの



データ量は半端無いですからねえ…数秒に一億と増える事もある  
そこに更に攻撃を入れる、  
すると、クレイドールは砕け散る…が、中身の緑色の情報の塊が私  
を飲み込む

「オ…ネエサマヲクルワセタ…アナタダケハ…ユルサナイ…！」  
くっ…段々と体が消えて衣玖…違う、行くのが分かる…  
意識は暗闇へと…

## 数週間後

…あれ以降、井坂先生は行方不明だ…

残ったのは全壊した博麗神社、まるで、井坂先生が死んだ事を思い  
浮かばせるように配置された、ウェザーメモリ、……絶望している  
霊夢さん

村の人々も悲しんでおり、村の中心には、【井坂深紅郎】と彫られ  
た像も建てられた

…崇められすぎだろう

しかし、私もかなり困っている、朝食と、毎日来る空さんの相手だ  
空さんも探し回っているようだが、一向に見つからないとか、

彼女の場合、何処を探したか忘れて、ずっと同じ場所を探してそう  
だが…

「…朝食、誰が作るんですか…」

空さんが井坂先生に好意を持っているのは分かっていた、だから私  
は身を引いた、というか空気だった

…違う、身を引いた

蓬莱人に無理矢理したのも、自分より早く死んで欲しくないという  
エゴだ

「……井坂先生……私、ずっと井坂先生の事が……」

「いやー失礼、遅れましたね……あ、続けていいですよ、少し休みたいんで」

！？

「ちょ、ちょ、死んだんじゃ……！？」

「懐かしい部屋だ……ああ、無限の可能性に……」

「悲しんで損しましたよ！」

「おおおお！これはウエザーメモリ……！！ああ、寂しかっただろう？ただいま、ウエザー……」

「無視すんなやアアゴルアアラアアア……！」

「ゴフエツ……？先に……地獄で待ってるぞおおおお……、おや、文君じゃないですか、何時から居たんですか？」

「最初から居ましたよ……？っていうか、人を散々心配させといて、何か言う事無いんですか……？」

「……え？ああ……主人公は遅れてやってくる……！」

「確かに、私達には長い時間でしたけどね……！読んでる人達からしたら32行目ぶりですよ、一分くらいしか立ってませんよ……！」

「コラ、メタはやめなさい、メタは、作者の文章力不足でそうなってるんですから、特に描写が下手」

「自分もメタってるじゃないですか……！」

……

「何で生き返ったんですか？」

「おや、君にとっては死んでたほうが良かったですかね……？」

「べ、別にそうとは言ってませんよ……！」

……面白いなあ……

「で、何故生き返ったか、でしたっけ……？それはですね……」

（医者、思い出し中）

「…此処は？」

「死後の裁判所とも思ってください、今から貴方が白か黒か裁判しますから」

「対一で話をする、

身長は私の腰ぐらい

右手には…あの、聖徳太子とかが持つてそうなの…アイスの棒みたいな奴

容姿は…よく、閻魔王が着ている奴…

閻魔？

「え？死後？あれ？私死んだんですかね？」

「ええ、死にましたよ」

なん…だと…?!

「では、白黒はつきり裁判を始めます」

なんだ、その可愛い名前は…

「はい、貴方は黒ですね黒、もう黒以外考えられませんよ、地獄に落ちなさい、Go to Hell」

酷いですねえ、一秒も経つてませんよ、適当にも程がある…

「ちょ、ちよつと待つてください！一応医者ですよ！？」

「助けた命の倍は人を殺してますので、黒確定ですよ、愚か者が」

「べ、弁護士を！弁護士を呼べ！！」

「死人に弁護士は要らない…」

「待ちな！俺が居るじゃないの？」

声の方向には…

「あ…あれは…！！第三話でてきてすぐ死んだ北岡宗一君…！！」

「黒を白に変える、スーパー弁護士、北岡宗一とは俺の事よ、井坂先生、弁護してやるから、少し待ってな」

複線…だったと言うのか！？

「まず、最初に…井坂先生は蓬莱人だ、死ぬわけがない、よってこれは何かの間違い、無効裁判だ」

「…気づかれましたか…そうですよ、無効裁判ですよ、……」

「まだ、裏に何かあるな…？さては、戦力として井坂先生を所持する気が…？」

「…！」

「残念だが、その事を俺が少しでも広めれば…アンタは全ての勢力から一斉に攻撃を受ける」

「…クツ…」

「井坂先生は誰の物でもない、そう、俺の物」

「意義有りッ！！私は貴方の物でも無いッ！！」

なんて事を言うんだ…

「…分かりましたよ、三途の川を歩いて渡って帰ってください」

「あの川って…水深が…何メートルあるか分からないんでしょう…」

「貴方の罪が浅ければ大丈夫ですよ」

「…」

とりあえず医者、移動中…

「…待ってください、待ってくださいよ、なんでこんなに流れが速いんですか…！」

「ええ、昨日の嵐で洪水に…」

「嵐…？」

（回想終了）

「ちょっと、凄い微妙なところで回想が終わったんですが…」

「気にしたら負けですよ、文君、とりあえず…朝食を取りましょう、空腹ですし…ね？」

私は…幸せだ

Wよ…永遠に / Sinkurou Isaka (後書き)

…お疲れ様でした、第一部、完、となります

第二部は…戦闘が少ない…ような…少なくないような…

まあ、そう言う事です！

Fタイムだ気を付ける／反省会……か？（前書き）

絶対、やるよね、こつこつ話

## Fタイムだ気を付ける／反省会……か？

…ふう、終わった、第一部が終わりましたね…

フフフ、此処までくれば私の勝ちですねえ…

なんたつて、第二部はドーパントが一切出てこないという噂ですし…  
もう…存分に診察できるでしょう、ああ、楽しみだ…

「甘い、甘すぎますよ、井坂先生、蜂蜜に浸したワッフルより甘い  
です」

甘い、それは甘すぎる、食すだけで歯が痛そうだ

「…誰ですか、貴方は…」

私の目の前に現れた…顔は黒頭巾を着用して、服装は黒装束、声にはボイスチェンジャーが掛かっている

「私は、もつとも存在してはいけない存在、自分自身が禁忌、自分自身が自虐ネタ、自分自身がメタ！…そう、私は作者だ！」

…なるほど、大体分らない

「で、何の用ですか？」

「いや…ね、一部終わったし…裏話とか…さ…」

「無いじゃないですか」

「あ、ありますよ！一個ぐらい！」

「無いじゃないですか」

「畜生無限ループか！」

…まあ、聞いてみますか

「…それは冗談だとして、何かあるんですかねえ？裏話」

「ああ、あるよ、当初の設定では井坂先生を女体化する気だったんだ  
DA 皆も一度は考えるだろう？」

考えないですよ…

「でもさあ、今気が付いたら、それは井坂先生じゃない…よってその  
ままに…」

「そうですか…」

「あと、モッコーさんが使ってた共同スペル、あれももつと活用したかったんだけど…悪い、ウェザーが強すぎた」

「でしようね、というか戦闘シーンなんて無かったじゃないですか」  
「…だって…東方のキャラクターってさ…一部は、凄いい攻撃方法分かりますけど…他の人、分かり難いじゃん、たとえば…さとりさんとか…あれ、相手の心の中にある強そうな弾幕を撃ってくるっていう設定だと自己解釈してるんだけど、あれじゃん、井坂先生、トラウマとかなさそうじゃないですか」

「ありますよ、幼稚園の頃、溺れました」

「弾幕じゃないじゃないですか…」

確かに

「次に…あれですよ、ナスカ…最初はですね、妹様がナスカとタブーもって、正常時にナスカ、発狂時にタブーって設定があったんだけど…悪い、めんどくさかった」

「死になさい」

「…  
」  
「というか、後半空気だし、イラネエ…」

「空気と言えば、文君も空気でしたねえ、椀君も」

「ああ、居たんですよ、神社の屋根裏とかに…」

「分かりにくいですよ、というか、それは文章では分かりませんよ」

「画力が欲しい…」

「…  
」  
「後は…射命丸さんにトライアルを持たせるつもりだったけど…」

「空気だったでしたから、いらないと」

「Yes」

「…  
」  
「面倒くさいだけじゃないですか」

「そ、そんな事は…大有りです」

「…  
」  
「暖かい感想が多いんだよね」



「確かに、しかし…お気に入り登録が増えないのは…」

「やっぱり、井坂先生が人気無いから…」

「貴方の文章力不足ですよ」

「な、何を言うんだ！井坂先生で検索してみる！評価は一番高い！」

「そりゃ、私を主体とした小説なんてむしろ一個も無いですよ」

…

「…れみりや＋霧彦ライブ」

「あれですね、作業中ずっと東方スイーツ（笑）！を聞いていたのが間違いです」

「洗脳美味しいです」

…

「井坂先生さ、原作見ると、もっと人を馬鹿にしてるんだよね」

「ああ、確かに、虫けらだとか言っていましたねえ…」

「黒だ、あんた」

…

「井坂先生さ、最近マジメに生きてるよね」

「ガイアメモリも充実してますし、なんていうか…欲しいゲームが手に入って飽きてきた感じですね」

「なるほど…」

「しかし、やはり…罪の無い人生はスパイスの効かない料理のようですねえ…」

「そうですね…」

…

…

…

…

結論『井坂先生は不滅』

Fタイムだ気を付ける／反省会……か？（後書き）

あ…あれ…？この話…要ら…いえいえ、必要ですよ？  
実は、活動報告で地獄兄弟の幻想入りを計画してたり…

更に燃え続けるMノあいつが帰ってきた（前書き）

アルビノってさ、アニメとかだと凄い持ち上げられるけど

障害とか多くて短命、周りからも気味悪がられる（特にアジアなどで黄色人種が主な地域）、いい事は全く無いと言ってもいいらしいですよ

井坂先生とかは実験台として好きそうだなッ！！

## 更に燃え続けるM／あいつが帰ってきた

### 紅魔館

不味い、非常に不味い…フランちゃんにテレビの話を…というか、時代が遅れているこの館の住人にテレビの話をしたのが…不味かった…！

「ねえ、買ってきて頂戴、河童辺りから」

「そうだよ、買ってきてよ！」

朝からずっとこの調子だしね…

「さ、咲夜ちゃんに頼」

「私は交渉が苦手なので無理です」

だろうね…日頃から出会った人間にはすぐナイフ投げるし…もう一種の人見知り…

「…分かった、買ってこよう…ハア…不幸だ…？いや、待てよ…これは…レミリアちゃんとフランちゃんから期待されてるんだ…！」  
…よし…行くしか無いな…！

### 人里

いやぁ…困りましたねえ…

医院に来てみれば…

「さあさあ、人間の皆さん御覧あれ、これこそ外の世界で流行している『プラスマテレビ』！」

玄関前で河童がテレビを売っていた

…何故？

『ぷらずまてれび、って凄いのか…？』

『いやぁ、河童の言う事だ、嘘かもしれねえぞ』

「そこの人間の貴方！嘘ではありませんよ！このテレビは河童達が

研究に研究を重ね、2000年もの年月を掛けて作成したテレビです！」

…中国二千年の歴史…？

『嘘だな』

『いや、待て、河童だ…二千年ぐらい生きててもおかしくないぞ？』

『何言っているんだ、あの河童、現代の言葉で言つと『ロリっ子』つて、いう奴だろ？』

『ばっきやろー、多分ロリババアなんだよ、ロリババア』

…ここまでそんな言葉が…

一体何処から…？

『ええ？ロリババアってあれだろう？（井坂）先生が言うには紅魔館の吸血鬼とかだろう？』

私でした

「…まあ、二千年は嘘として…実は三ヶ月だよ、三ヶ月」

それは短すぎる…！

「分かった、買おう」

一人の男が前に出て行く…黒いスーツに一点だけ血のように真っ赤に染まったスカーフ…

尻…霧彦君…！

…というか、何故日の光りを浴びて死なない…！？

「毎度あり〜、さあ、このテレビ！在庫は後5台！重くて持つて来れなかった！」

五台持つてこれただけ凄いと思いますが…

『おい、あれ…たしか紅魔館の吸血鬼と婚約した婿だろ？』

『確か…かなり優秀な人物だと聞いたぞ…？ロリコンだが…で、やはりあれは…』

『『本物…！』』

ロリコン…そうですけど、一体誰

『（井坂）先生さあ…ロリコンとかさ、何処の言葉なんだろうな？』

『外の言葉なんだろう、さあ、買っぞ！』

…私でしたねえ…

## 紅魔館

しまった、コンセントが無い、この館

「コンセントが無い…！テレビが見れない…！そんな…！」

「まあ、そんな事だと思ってたけどね」

レミリアちゃんは死ぬほど落ち込み

フランちゃんは…大したショックも受けていない

…絶対姉妹逆だ…

「レミイ、泣かないで、私が何とかするから…」

「な、泣いてなんかいないわよ！何を言っているのパチエ!？」

…泣いたのか…

「……用は電力が必要なんでしょう？」

「まあね」

というか、あの河童…絶対批判受けるだろう…コンセントどこるか  
電気さえ無いのに電化製品を売るなんて…

「…できた」

何故!？

「さすがパチエ！私に出来ないことを平然とやってのける！そこに  
痺れる懂れるう！」

…テンション高っ

「まあ…とりあえずチャンネル回すか…」

1 c h

【カゝパネットカパネットゝ夢のカパネットにとりゝ  
…なん…だと…】

2 c h

【今回ご紹介するのは…】

…ば…馬鹿な…!？

3 c h

【この！絶対に死  
じょ…冗談じゃ！

4 c h

【ない、サンドバ  
ありえない…！

5 c h

【ツク、藤原】

ふざけるなよ…！？

6 c h

【妹紅！】

…！？

7 c h

【無論】

8 c h

【ダッチ】

9 c h

【ワイ】

10 c h

【フ】

11 c h

【として】

12 c h

【も、使えます！お値段は、なんと…【prrrr!】、失礼…  
なんだよ…！今、配信中…？商品が逃げた…？畜生！何やってん  
だ！役立たずが！そこで首でも吊つてろ！】

…

「クソッ！やられた！」「」

あの河童め…絶対に許さん…！

「こんな馬鹿げた商売を…！？…そうか、馬鹿なのか…！？」

井坂医院

あのテレビ、やはりまともな商品では無かったようですね…というか、絶対あの河童…自分でガイアメモリとか作ってますよね…というより、絶対毒素にやられてる

「次の方どうぞ」

入ってくるのは…尻…霧彦…君

「おや、珍しいですねえ、どうしましたか？」

「その前に一つ聞かせてくれ、…外に同じような妖怪が大量に居たのだが…あれは…？」

「ああ、あれですか…あれはですねえ…まあ、なんというか…」

「正直に話したまえ」

「白玉楼から霊を提供してもらって、それに空君の能力をガイアメモリ化した物を

挿し、実体化させたガードマンですよ」

「…人手が足りないからか…」

「そうですね、それと…此方も一つ質問を…、貴方、何故日光に当たって平気なんですかねえ？」

「ああ、それは…1/4ナスカメモリで1/4人間で1/4幽霊で1/4吸血鬼だから、日光のダメージよりも回復力が勝っているんだ」

…そうですか

「で、何の用ですかね？」

「ああ、河童の居場所を教えたくないか」

「川でしょう、胡瓜でも置けば簡単に捕まりますよ」

「ありがとう、じゃあ…まずは爪を全部剥がす事から始めないと…」  
…相当怖い事を考えてらっしゃる…

「…よし、お礼に言い事を教えてあげよう、後ろに気を付けろ」  
そう言って、即座に逃げ出す

…一体何…



「イイイイイサカアアアア！」

後ろから炎

…どう考えても不死の人だ…

「ひ、久しぶりですねえ、妹紅君…」

「えーえー確かに久しぶりねえ、散々人の体で実験した拳句河童に売り渡すとはあ…その命！神に返しなさい！」

不味い、不味すぎる…

そのうち何処かの金持ちの家に売り渡されて一生閉じ込められたままになると思ったのですが…！！

「フッフ…それに面白い物も拾ったのよ？」

【MAGUMA！】

直後、彼女は右手に赤いメモリを挿す

そして、右半身だけ、高温で焼け爛れ、それを赤く塗りつぶし、固体化させたような姿へ

「今の私の怒りの温度は北極を一瞬で溶かせる！」

…私も不死なんですがねえ…

更に燃え続けるM／あいつが帰ってきた（後書き）

いや、ジュエルさん硬すぎですよ、チートじゃないですか  
その硬さを半分でもいいから蟹刑事にあげて欲しいものです

更に燃え続けるM／幻想郷は今日も平和です（前書き）

実は某動画サイトで井坂先生のMAD作ってたりします  
楽しいよね、MAD作り

## 更に燃え続けるM／幻想郷は今日も平和です

火災ですよ、火災

「ちょ、落ち着いてくださいよ！妹紅君！ここは病院ですよ！」

先ほどから溶岩弾を乱射して暴れまわる妹紅君、井坂医院が半壊だ！

「お前が作り出したのは病院なんかじゃない…人を実験台にする地獄だ！」

人は実験台にしてませんよ、人は

しかし困った…メモリは医院の中だし（not 性的）…打つ手無し、ですか…

とりあえず死にはしませんが、痛覚はありますしねえ…どうしたもののか…

「ああ、ちょこまかと！動く痛いわよ！？」

「動かなくても十分痛い【シュゴツ】！？」

右足が吹き飛んだ、無論転倒

『それはそれを掛けます。ウィルはそれをセキュリティリスクに適用することになっています 教師に。（しまった！危険人物に当てるつもりが先生に！）』

『U-13 行われること。（U-13！何している！）』

「馬鹿野郎オオオオ！！複製達！誰を撃っている！？ふざけるなアツツ！！」

複製した空君達の射撃でしたか…！！

本人並みのノーコン…！！

というより、彼女（？）達は言語回路がまだ安定しないので何を言っているのか分からない…！！

「受け取ってくれ…私の憎しみと憎しみと憎しみのオブマージュ…」

「」

巨大な溶岩弾が現れ、徐々に巨大化していく…

不味い…！このままでは…！！

「待つて！井坂先生を殺さないで！」

草陰から姿を現したのは…あれは、夜雀のミステリア・ローラレイ君…！

「お願い！殺さないで！」

更にもう一人…あれは…リグル・ナイトバグ君…！

「？こ、殺さないでくれー」

更にもう一人…あれは…ルーミア君…！

「何故止めるのよ！？」

まさか…私を庇っ

「…私が殺すからだ！」…」

どうせそうだと思ったよ！畜生！

「まずは目からくり抜いて…！次に内臓を…！」

やめてください、本当に、ミステリア君

「いやいや、全身に人食虫を張り付かせて…」

もつとやめてください、リグル君

「頭から行っちゃおうよー？」

死ぬるならそれが一番いいんですけどねえ…

「…というか、何故足が回復してるの？」

妹紅君が問いかけて来る、確かに、気が付けば右足治ってますねえ…

あ、そうだ、妹紅君に蓬莱人になった事話してないですね

「実は、私も蓬莱人なんですよ」

…

沈黙

「ごめん、聞き取れなかった」

「私も蓬莱人なんですよ」

…

沈黙

…

「嘘だそんな事ーッ！」

「いや、本当ですよ、ミステリア君」

「嘘だッ!!」

「本当ですよ、リグル君」

「ナイスジョーク、だな…」

「ジョークじゃないですよ、妹紅君」

「そーなのかー」

「そうなんですよ」

…  
「あ、屋台出さないと…」

…ミスティア君が去って行く

「ん、この時間帯なら近くにチルノが居るな…遊ぶかなあ」

…リグル君も去って行く

「……月の無い夜道には気を付けろってね…!!」

…すみません、謝りますから出来ればもう会いたくないです、妹紅君…

「……」  
「……」

顔を見合わせるルーミア君と私

…  
可愛いなあ

…  
ツハ!?! いかんいかん、子供をそういう目で見るんじゃない私  
「……?」

視線に気が付いたのか首を傾げるルーミア君

…  
駄目だ、可愛い

…  
抑えろ…抑えるんだ…私…

「私は井坂先生が好きだぞー」

…  
持ち帰ってしまおうか…?

…

よし、まともな理由を考えるんだ…！考える！私！（崩壊中）

「今日、鍋にするんですがね、来ますか？」

「行く行く」

釣れたッ！！

「んじゃ、行きましょうか…」

「いいけど、病院はいいのか？」

背後

半壊の私の医院

……

どうしよう？

「ええ…まあ、明日なんとかしますよ…」

目を離れた隙にルーミア君が居なくなったら首吊り物だ…

このチャンス…逃がさない！

『ルーミアを性的対象として見るまで…それがお前の絶望へのタイムだ！』

！？今照井竜の声がしたような…

一方…何処かの血で染まった真つ赤な川

「も…もう許してえ…」

「許さん、貴様だけは許さん、絶対にだ」

「あ、あのテレビを売った事に付いては謝るよ！こつちだって経営難だったんだよ！」

「知るか、貴様の事情など…！重要なのは貴様の死で私の怒りが収まるか収まらないかだ」

ボロボロで半分以上死んでいる河童に

詰め寄る青い騎士のような姿の妖怪…ナスカ…もとい霧彦

「や、やめてくれえ！私達は盟友だろう？！」

「知るか…！よくもあんなキチガイテレビを！」

「わ、わかった！まともなテレビを一個あげるからあ」  
「…本当だな？」  
「こ、これだよ！地デジにも対応してる！」

## 紅魔館

「新しいテレビを貰ってきたよ」  
「さすが私が認めた男ね…」  
フフフ…私の株上昇中…  
1ch

## 【カゝパネ】

「畜生あの河童がああ！！」  
即座にテレビに回し蹴り



更に燃え続けるM／幻想郷は今日も平和です（後書き）

幻想郷に住んだらロリコンにならざるを得ない

## Ⅰが足りない／氷結娘？（前書き）

原作の二話あたりのアタツシユケースの中身のメモリに…意味の分  
からない物があるんですよねえ、ジャズとか…

何がしたい、ディガルコーポレーション

何がしたいんだ…ディガルコーポレーション…！！

## 工が足りない／氷結娘？

ああ、鍋が楽しかったなあ…

椀君が泥酔して暴れまわったり

椀君が泥酔して暴れまわったり

最終的にはルーミア君に食われたり…

いやー楽しかった

寝付こうと思ったら布団に妹紅君が立っており…死に掛けたり

撃退し、寝ようと思ったら、フジヤマヴォルケイノが飛んできたり…

正直、楽しいというより疲れた

…なんて事を考えながら医院に来てみれば…

見事に凍り付いていた

…何故？村人の手によつて僅か三時間で完成した医院を何故…？

誰だ…！？誰だ！村人の努力の結晶を凍りつかせたのは…！

「お、井坂先生…凄いやね、これ、先生の作品？」

物凄い質問ですね、空君

「いや、色々突つ込みたいんですが…」

「ちよ、先生、朝から突つ込みたいとか下ネタ自重してくださいよ」

…もうやだ、この八咫鳥喰い地獄鴉

「誰か、この犯人を知りませんかねえ？」

思わず独り言、許さん、絶対にだ

「恐らくチルノ辺りだろう」

思わぬ回答、この声は…！

「おや、慧音君でしたか…おはようございます」

「ああ、おはよう」

挨拶しないと死ぬ、あれは死ぬ、何かは言いませんが、死ぬ

「おはよーございます、今日も涼しい雨天ですね」

意味が分からないですよ、空君

「涼しい雨天…？今日は…涼しくも無い雨天だぞ？」

「え？嫌な雨天って言わなかったっけ…？」

「（慧音君、まともに相手をするとか疲れるので、あまり考えずに相手をしてみてください）」

「（…分かった）」

自分の喋った事も忘れるって…

「で、元の話に戻しましょう…チルノ、とは一体…？」

「ああ、霧の湖に住んでいる妖精だ」

「妖精…」

「妖精…」

…空君、若干違うんじゃないでしょうか…？

「しかし、確か妖精は人間以下の存在では…？こんな事できるはずが…」

「確かに、普通の妖精、ならばな…だが、チルノは違う…普通の妖精の何倍もの力を持っている」

…そーなんですかー

「よし、ならば…潰すまで…！」

「…まあ、貴方なら大丈夫だろう…しかし、此処までの事は今まで一度もした事が無かったな…井坂先生、何か彼女にしたか？」

「…いや…別に…？私が手を出したのは夜雀と蛭とルーミア君だけで…そうか、リグル君はチルノと遊ぶか…みたいな事を言ってたね…復讐、ですか…フハハハ！くだらない！何処かの刑事を思い出しますねえ、蟹じゃない奴」

「井坂殿、貴方を一発殴らせてくれないか？」

…怒ってますね

「なるほど…だが断る、この井坂深紅郎のもっとも好きな事の一つは【デユクシツ】ゴはッ！？」

い…痛すぎる…！これが子供を守る教師の力か…！

「…は、始めてですよ、女性に打たれたのは…いや、始めてじゃありませんね…妹紅君とかから何百発と貰ってますね…」

正直勘弁してほしい

「…妹紅に何をした？」

不味い、一方的に私が悪い事になっている…！（超正論）

「いえいえ、少し、蓬莱人の耐久度のテスト【デュクシツ】ぎゃあ！  
痛い…これが…親友を守る教師の力か…！」

「そうか…分かったよ、井坂先生、私の核の炎で氷を溶かせば…」

「やめてください、普通の人間は近寄れなくなりですよ、それ」

「というか、そんなに火力調整できないでしょう…君…」

「…そういえば、ガードマンは一体何をやっていたんだ…？」

「昨晚、眠れなくて言語回路を調整したガイアメモリ…いや…違う…  
なん…だと…」

「これはガイアメモリじゃない！ただの制御データやら色々超科学力の詰まったメモリだ！」

「…まあ、ガイアメモリでいいでしょう…」

「地球の記憶とか全く詰まってないですけどね」

「…なんてこつたい…おい、U-11お前が宴会やろうぜ！とか言  
って夜間警備サボったらこれかよ」

「ハハハ、俺の責任じゃねえよ、連帯責任だ」

「正論だけどよお…」

「…宴会？」

「というか、何故男言葉かというのですね……」

「細かい部分は設定できなかったんですね、いやー失礼

「ディガルコーポレーションのオリジナルの器具とかあれば出来ます  
けどね、河童の複製品ではあれが限界なんですよ

「……？」

「何処で言葉覚えた…？」

「おお、昨夜宴会に押し掛けて来た妖怪じゃないか！」

「お、おやつさん、早いつすね」

「あれ、名前は分らないですけど、私の信者一号じゃないですか  
「しかし…見た目はいいのに言葉がなあ…誰に教わったんだい」

「風都を駆け巡るハードボイルドな人、って言ってましたけど…あ

りや、ハーフボイルドだな」

左…翔太郎！

いや、落ち着け…そんなはずは無い…なんせ、奴が幻想入り（外の世界から来る事を言うらしい）するはずが無い…！

「いやあ、スキマ妖怪の結界も脆いものだな…俺達が力を合わせれば簡単に穴が開く」

…ええ？確かに…そりや、空君と同等の力くらいにはなりますけど…

「おい、この制御棒見ろよ、トリガーのメモリの改ざんデータを適合した新型だぜ？」

「お、格好いいなあ、俺にも貸してくれよ」

「んじゃ、一日交換な、お前の…たしかメタルのメモリの改ざんデータを適合した奴だろう？」

「そうそう、50mmの鉄板ぐらなら折り曲げられるぜ」

…

おかしい、私の目には自分達で新化し続ける複製達クローンが見える…！

「何故だろう、私のクローンなのに凄い頭がよさそうな気がする…」

いや、決して私が馬鹿だと認めた訳じゃないけど…」

空君、落ち込むな、あれはもう君のクローンではない…

一種の妖怪だ…

「しっかしなー…井坂先生が生前凄い悪人だったとはなあ…」

「ばっきやろー左が悪人だろ、絶対、俺達が宴会していたら【ドーパント…！？】って言い出してさ、一応会ってるから【Yes】っ

て答えてみれば…殴りかかってくるんだぜ？」

そりや殴られますよ、やっぱり馬鹿だ、こいつ等

「貴女達、宴会は楽しかったんですかねえ？」

「『おはようございます、井坂先生、何用でしょうか？』」

遅い、遅すぎる、猫被るのが、やっぱり馬鹿ですね

「いや…バレてますから、もう、思いつきり聞こえましたから」

「『悪いのはコイツです！』」

それぞれの顔を指す複製達…もう駄目だ、こいつ等

「というか、確か、君達20体ほど居たはずですが、今居るのは……」  
彼女達の右腕に一応シリアルナンバーの刺青があるので、一応確認する

$$\begin{bmatrix} U \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix}$$

U  
-  
2  
0

【U-03】

一貫性ねえ

「他は？」

『ただいま、太陽の畑を侵略中です』

何やってんだ！？こいつ等

「何故？」

『あの地の土は栄養が十分にあるので、村を作るのに最適だよ』

『何の村、とお考えですね、簡単ですよ、我々の村ですよ』

怖い、怖くなくてきたぞ

『ご安心ください、職業の選択肢の一つに病院のガードマンも入れますよ』

ええ？

【本部！本部に連絡！四季のフラワーマスターと交戦中！援護た<sup>ン</sup>ザザザザ】

U-12が死んだ

「嘘だろ……!? 相棒が死んだだと……!?」

【ハアッ！ハアッ！畜生……！好き勝手遣りやがってええええええ！！】

【あんだ達ねえ、人の庭に勝手に攻め込んできて何言ってるのよ！】

【おい、U-109！？何をやってる？！】

【ファングだ……！ファングを使うしか……！！】

待て、色々と突っ込みたいのですが、とりあえず、U-109って  
何ですか、U-109って

「**実は、我々の生産ラインが安定しまして…U-1からU-20ま**

でを霊を媒体としたオリジナルと呼び、U20は、薬物とオリジナルの単細胞を媒体としたセカンドシーズンとして…」

怖すぎる、こいつ等…一晩で何やってんだ…!?

『そして、実を言くと…U-01が奇跡的に紅魔館のメイドの能力をラーニングに成功し、我々は、すでに一千万年ほど経っているんですよ…その代償として、01は能力を使い続ける為だけの機械と貸しましたがね…』

『アイツは英雄だよ…ファーストプラン（U-01とU-03）の一人として鼻が高い』

駄目だこいつ等、ここより学園都市…?とかに行つたほうがいい、絶対に

【クソツ！撤退だ…!!逃げるぞ…!!】

【待ちなさい、私は基本的に深追いはしない主義だけれども…今回はばかりは…!怒りが収まらないわ…!!】

【ち…!畜生!此处までか!】

【大丈夫だ…俺に任せてくれ…!!見つけたんだ…ファングを…!】

【ば、馬鹿野郎!ファングはオリジナルの為に作られた試作品だぞ!セカンドの俺】

【ここで俺が犠牲にならなきゃ全員が死ぬんだ!!俺一人を犠牲にしてお前らを救えるならそれでいいんだ!】

【クソツ…!いいか、英雄なんて呼ばないからな!?お前はただの馬鹿野郎だ!】

【ケツ…うるせいやい、さっさと逃げろよ!】

【……生きて帰ってきやがれ…!】

【死ぬとでも?】

【…馬鹿野郎が!】

…え?何?何なんですか?ちょっと、チルノとやらを懲らしめに行こうとしてみれば、いつの間にか違う話になっている…

『109…彼女は優秀だったな…、歌を送ろう』

『ああ…!』



一千万年も経てば男言葉が馴染むだろうよ、そりゃ

『I'm a thinker.』

『I could break it down.』

『I'm a shooter. A drastic baby.』

『Agitate and jump out.』

『Feel it in the will.』

『Can you talk about deep-sea with me.』

『The deep-sea fish loves you forever.』

『All are as your thinking over.』

『Out of space, When someone waits there.』

『Sound of jet, They played for out.』

…お疲れ様でした…いや、これが国歌？なんですかね…？思いつきり合わないですよ

『以上…国歌、Thinker…でした』

『I'm Thinker to-to-to-to-to』

『I'm Thinker to-to-to-to-to』

…駄目だ、私の手に収まらない、この人達…

…もういいや、今度相手しよう、とりあえず…チルノとやらを…ねえ？

Iが足りない／氷結娘？（後書き）

Thinkerは神曲ですよ、神曲、あ、亡き女王の為のセプテッ  
トも神曲ですよ、Sweets Timeも神曲ですよ、ああ、  
もう、全部神曲でいいよ！

…風都タワーとかも神曲ですよ、超神曲、まだ人類には早いですが  
ね

Ⅰが足りない／このままでは井坂先生の寿命がストレスでマッハなのだが…（前

ウエザー！ウエザー！助けてウエザー！

直挿するガイアメモリ）

最初では井坂先生の女体化の提案もあつたんですけどねえ、

それ、井坂先生ちゃう！永琳や！となってしまうために無くなりま  
したねえ、残念

というか、女体化井坂先生に（メモリを）直挿するっていうのが  
表現的に危ない

追記：ええい、深夜に書いた所為で文章が滅茶苦茶じゃないか！…

え？元々滅茶苦茶…？

「Iが足りない／このままでは井坂先生の寿命がストレスでマッハなのだが…」

見つからない、何処だ？何処にいる…チルノ、とやら…？

「…見つけたら…どうしましょうかねえ…脳に直接スタンガンを繋げて焼いてみるのもいいですねえ…それとも…大型電子レンジの中に入れてやりましょうか…？…いや、許しを請うまで皮膚を縫ってやりましょうか…？」

私は正常ですよ、ええ、物凄く正常です…

とか考えてる内に面白い物を見つけました

サイドに緑の髪をまとめ、背中からは虫の羽のような物が生えた人物…！

確か名前は大妖精、でしたかねええ？何でも瞬間移動の能力を持っているとか…！！

捕まえて空メモリのVer2、大メモリでも作りますが、それで複製達…何か名前を付けますか…

……量産型エヴ……アダム、アダムで行きましょう、それでVer

2はイブで確定ですね

フフフ、広がる想像、楽しみな世界

さあ、さっさと捕獲しますかね…

【WEATHER！】

私の姿はエクストリーム体ではなく、普通の形態、あれから色々と試してみましたか…

よほどテンションが上がらないとなれないようですね、つまり、変身にはプリズムリバー姉妹の一人が必要ですねえ…

「フフフ…大妖精イー！ああそびましょー！！」

不味い、エクストリームするかも知れませんが…

「ひゃあ！？変態！？ロリコン」

「誰がロリコンですか…！！」

「え…いや、だって…絶対ロリコンじゃないですか…」

「…ほおう、覚悟は出来ているようだ、ならば…容赦は要りませんね…!!」

少し頭に血が上ったので、雷を落としてしまった…  
消し炭になって無ければいいですけどねえ…

「…か、雷?」

まあ、避けてますよねえ?

「他にも、こんなのがありますがねえッ!!」

両手から熱光線を乱射する、それも簡単に避けられる

…そうだ、いかんいかん、捕獲するんでしたねえ

私は腰に装着されていた私専用の武器、ウェザーマインを右手に取る武器があるメモリというのはレベルが高いメモリという証であり(以下略)

つまり、この世のドーパントと妖怪と神は私に診察されるべきなんですよ

此方が診察してあげましょう、と言っているのに断るとは…

まあ、さておき…

とりあえず、右手のウェザーマインで、大妖精を捕獲、直後に微電流を流す

瞬間移動というのはですねえ、集中しないと多分できないんですよ、なので、本人には感知出来ない程微量の電流を流し、集中力を切らす、なんと完璧な…!!

「フッフ…捕まえましたよ…、そうだ、君、チルノ、という人物を知っていますかねえ?」

興奮の余り当初の目的を忘れる所でした…!!

「…し、知りません!」

…嘘だッ!

「素直に話したほうが楽しいですかねえ?!」

ウェザーマインの電力をあげる、大体気絶する電力の1/3ぐらい「ッ!?!くああああ!?!」

体をビクビクと痙攣させ、涙目で悲鳴をあげる大妖精、

いえ、別に電磁パルスを神経に埋め込んだ訳じゃないんですけどね？  
「もう一度聞きましょう、チルノ、という人物を…」

いい掛けた瞬間、巨大な氷塊が私に向かって飛来した、冗談じゃない  
ない

「くっ…！？氷塊…！？」

「大ちゃんから手を離せ！ロリコン！」

またロリコンって呼ばれたよ（笑）

「何故私の邪魔ばかり…！許せん…！！」

目に写るのは、背から氷で作成されたような翼を生やした、幼…少女

「君がチルノ…君、ですね？」

「そーだ！」

「よっしゃ、殺す、絶対殺す…！！コイツは殺さない駄目だあー  
っ…！」

ゼエツテエー殺さないと駄目ですよ、ねええ？

「…あのさ、何であたいがアンタに恨みを買われてるのさ」

…？相当頭が悪い子なのか？バカですね、バカ

「それは当然、…私の医院を氷結させたからですよ！」

「…はあ？」

はあ？って…あれ？もしかして勘違い…

「そ、それは有り得ませんよ、だって、チルノちゃん、昨晚、妙な  
人に焼き消されましたから」

「あの屈辱は絶対に忘れない…！！」

焼き…消された…？

凍結した井坂医院…私に憎悪の念を抱いている人物…凍結能力があり、尚且つチルノ以外、そして、炎も扱える…そのような多彩の能力の持ち主は私の知り合いには居ない…恐らくガイアメモリを使用した…では、炎がガイアメモリか、しかし、マグマは私の手元にあるため違う、よってガイアメモリは氷結能力…私に憎悪の念を抱き、尚且つ炎を操れる人物…

藤 原 妹 紅

あの不死野郎……！！メモリはアイスレイジですか……！！  
今頃一体何処に……？！

「ふ、フハハハ！ざまあみろ！井坂深紅郎！」

背後からの声、見つけました……！！

「貴女でしたかあ……！！絶対に許さん……！！」

「ハハハ！私がお前みたいな奴に捕【落雷】っ！？」

……殺せないならまず気絶させ……

調教すればいい……！！

まずは電磁パルスを精神に埋め込んで

2度とまともに考える事の出来ない、ただの人形にして富豪に売り  
渡してやりましょうかあ？

フハハハハ……！！

……

翌日、焼死体に限りなく近い井坂深紅郎と全焼した井坂医院が発見  
されたことは、誰もが知っていることである

Ⅰが足りない／このままでは井坂先生の寿命がストレスでマツハなのだが…（後  
実は、A C f a x 東方の作品も書いているんですよ、タイトルは東  
方首輪猫、興味のある方は是非御覧になってくださるとうれしいで  
す、  
以上異常な宣伝でした



## 百物語 1 (前書き)

今回は本編進まないです、脇道が普通のタイトルで、本編がW風のタイトルになっている、はず  
え？毎回話が進んでないだって？気のせい気のせい

## 百物語 1

「えーただいまからー百物語大会をー始めたいとー思っただいでー」

…どうしてこうなった…！？

そうだ、事の始まりは三日前…！！

）

「百物語がしたい…」

「何言ってるんですか、井坂先生、脳が腐りましたか？」

文君、最近毒舌ですよ、何故？

「いえ、あれじゃないですか、百物語、終わると何かが起こると言うじゃないですか」

「信じてるんですか？ロマンチック（笑）ですね」

…何かした？私何かした？

「…その台詞を鴉天狗が言うのも…それより、ここは幻想郷、何があってもおかしくない、…ので、私は今からこっくりさんやらにやら、全て試そうと思っんですよ」

「そんなオカルトチックな…ガイアメモリはどうしたんですか？」

「正直飽きた」

「B型ですね？すぐに吸血鬼の餌になってください」

…悲しくなってきた…

「まあ、記事にもなりますし、いいでしょう、人集めは私が担当しますよ」

…あれ？意外と乗ってる？

…ツンデレか！

）

私が原因でした

「今回はー大変忙しい所ー集まって頂きーありがとうございますー」

運動会ですか？…何を考えてるんだ…文君は…これ、百物語じゃない

「ではー選手の紹介をー」

選手！？

「ではーAチームー紅魔館チーム…」

おい、吸血鬼何やってんだ！？

天候を曇りに設定しといてください、つていうのはそういう意味ですか！かなり疲れるんですけどね！？天候の固定！

「代表の霧彦さんに、意気込みを聞きたいと思います、どうぞ」

「…自分の妻達を怖い目に合わせるといいうのは心が痛むが、それでも怖がるレミリアちゃんとフランちゃんの顔は可愛いと思うんだ」

駄目だ、この霧彦…はやく何とかしないと…

「馬鹿あ！霧彦の馬鹿あ！」

「何がそこまでお姉さまを怖がらせてるのか分からないわ…」

「安心してよ、フランちゃん、…すぐに泣かせるから、君も」

誰か！この中にお医者さんは…！私が医者でしたね、無理です、手遅れですね

「えー、もう貴方が優勝でも誰も文句を言いませんね…ちなみに、吸血鬼二人に霧彦一人の大変バランスのいいチーム構成となっております、優勝候補の一つです」

バランス！？というより、何ですか、その霧彦一人、つて…吸血鬼三人でもいいんじゃない？

「次、Bチームー白玉楼チーム…」

本物の幽霊じゃないですか、それ、なにやってんですか

「リーダー、というより、保護者の妖夢さんにお話を聞きたいと思います」

「正直帰りたいです…」

御尤もで、  
こもつと

「あら、妖夢、怖いのか？」

「怖いですよ！幽霊ですよ！？幽霊！足が無いんですよ！？」

「私も幽霊だし、貴女も半分幽霊じゃない」

「足あるじゃないですか」

足！？足があればいいんですか！？テケテケがだめでトコトコがOK！？

「はい、貴女達が既に怪談話です、幽霊一人に半人半霊一人の二人構成で、若干攻撃型かと思われます、面白い試合を展開してくれそうですね」

こ、攻撃型…？

「次、Cチームー人里チーム…」

ああ、やつと普通…

「井坂アー！！シヨック死させてやるから待ってるよオー！！」

じゃなかった、妹紅君じゃないですか、あれ

「保護者の慧音さんにお話を聞いてみたいと思います」

「まあ、頑張りはするさ…」

「ちなみに優勝時の商品は？」

「妹紅の服…忘れてくれ、教材だ、教材」

彼女だけはまともであって欲しかった…！！

「ちなみにチームは、半獣一人、不死者一人となっております…防御型ですねえ」

防御！？

「そして、最後のチームです…Dチームー井坂医院チーム、リーダーの井坂先生にお話を聞いてみたいと思います」

私ですか

「ええ、なんででしょうか、はい、慧音君が割りと人格破綻者だったのが今の所一番怖いですね」

「はい、屑コメントありがとうございました、やる気あるんですか？馬鹿なんですか？首吊るんですか？」

何この怖い鴉天狗

「ちなみにチームは、変態一人に天狗二人に良く分からない鳥頭な核爆弾一人と、なっております、非常にバランスの悪いチームですが、トリッキーな試合が期待できますね」

試合！？

「計、十一人です」

百人集まってねえ

「なので、十一物語となります、いい記事ができそうですねえ？」

「では、夜三時から再開するので、一旦解散です、話す話を決めておいてくださいねー」

…何故集めた

医者待機中…

三時、なりましたね

「では、お集まりになりましたね？」

「ハハハ、レミリアちゃん、私の後ろに隠れてないで出てきなよ」

「ばっ！隠れてないわよ！身を潜めてるのよ！」

世の中ではそれを隠れるという

「では…ルールの説明をば…単純です、一人ずつ話し一番怖かった話をしたチームが優勝です、その後、怖かった話の投票をしてもらう訳ですが…口頭では自分のチームを投票する事は決まっているので、審判にさとりさん呼びました」

「…こんばんわ、正直帰りたいです」

でしょうね、お疲れ様です、見知らぬ少女よ

「あ、井坂先生、あれが私の飼い主です」

なるほど、…全く、お宅

「『お宅の空君が毎日来て割と大変なんですよ？ちゃんとしつけてくださいよ、迷惑ですねえ』…すみません」

なん…だと…！？

「『どうして私の考えている事が分かった！？素晴らしい…その能力…原理が知りたいですねえ』…褒め言葉として受けとっておきます…これは、この三つ目の目で相手の心を見透かしているんですよ」なるほど、2Pにコントローラーを挿せば心を読めなくなるんですね  
「『よし、剥ぎ取るうすぐ剥ぎ取るう、遠慮は要らない、すぐに剥ぎ取るう、三秒だ、痛みは一瞬だ、その目を剥ぎ取って…』やめてください！死にますから！」

「私にとって、死など…プリウスよりも安い物ですよ！」

「安…安くない！」

的確な突っ込みありがとうございます、空君、だが、何故か腹が立つ

「へえ、心を読む能力か…面白い」

霧彦君、コイツは私の物だ…！！

「…ちよつと…ヤダ…何考えてるんですか…」

霧彦君…何考えて…

「や、やだあ…やめてくださいよ！そういう趣味無いですから！」

駄目だアイツ、小五ロリ（悟り）に萌えてやがる

「はいはい、精神的セクハラは後でやってください、始めますよー

十一物語」

百物語…

（本編開始）

一話目…霧彦…『助けて』

あれは…私がまだ、ディガルコーポレーションの購買部に居たときだった…

私は、道端で落ち込む女性を見つけ、さっそくメモリを販売しにいった

今思えば、あの時売らなければあんな恐怖を味わう事は無かったの



次回、紅魔館の真の恐怖が明らかになる…！スカーレット姉妹に襲  
い掛かる悪魔<sup>メイド</sup>の正体とは…？



## 百物語 1（後書き）

ほら、私の作品って妹紅ちゃん、壊れ気味でしょ？好きなものほど、最後には壊したくなるんです

## 百物語 2 (前書き)

寝込んで井坂先生と夜を共にしていましたサーセン (not…何も言っまい)

## 百物語 2

「次は… フランさんお願いしますね」

姉とは対照的に全く怖がって無いスカーレット姉妹の妹、フランドール・スカーレット… いや、此方に物凄い殺気を向けているんだ、あの子…

いやさあ、勝負を時間勝ちしたりしましたけどねえ… 確かに、確かに私が悪いですよ？

だが 私は 謝（文×謝） らない

〈本編開始〉

二話目： フランドール・S… 『メイド』

ん、私の番ね

所で皆

スポーツはいいぞ

… いや、外に出ないから見た事無いけど、きつとエキセントリックでファンタスティックで特別な存在なんでしょ？

あれは… つい、先日の事…

館を歩いてたら、咲夜が居たのよ… で、暇だったし後を追いかけたの、で、そしたら、お姉さまの部屋に入ったのね、んで… いきなり中から「（自重）」とか「（自重）」とか聞こえてきて（自重）で（自重）になつて（自重）で部屋に連れ込まれて（自重）し（自重）ね（自重）、（自重）（自ちよ… もう無理だ）…

これで私の話は終わりだよ、次、誰？

く終了く

「怖え……」

「怖いって……あのメイド……やっぱり様子がおかしいと思った……」

「た、大変だ！規制していた自重さん（仮名）が過労死寸前だ！井坂先生！助けてあげて！」

「ば、馬鹿らしい……馬鹿らしすぎる……」

「何ですか、あのメイド長……怖すぎますよ……  
恐ろしいほどの……」

「ロリコンだ……」

「いや、待てよ……？もしかして、あれじゃないか……今もこの場に居たり……怖ッ……！」

「たしか、時間を操ると言う事は空間を操ると誰かが言っていた……！！  
あそこの押入れ……中に誰か居るような……」

「ヤバイヤバイヤバイ……！何処にでも居るって事ですよね……！？」

「……し、心臓が……！！」

「……皆さん怖がりすぎですって……」

「そういつてもですね、さとりさん……怖……」

「待てよ？なぜ此処まで恐怖心を煽られるんだ……？」

「確かに、怖い話にはなるが……私には無害だ、怖がるのは紅魔館姉妹の二人だけだ……」

「……！何故気が付かなかったんだ……！！恐怖心を煽り、自壊させる絶対的な闇の力……」

「テラーのメモリ……！！」

「しかし、一体誰が……！？とりあえず、この場から離れなければ」

「皆さん、落ち着いてください、これはドーパントの仕業ですよ」

「うわああああ……！あのナイフ……！！咲夜の……！！」レミリア

「ばばば馬鹿を言うんじゃない、レミリアちゃん…そんな事が…  
！！咲夜ちゃんのだ…！！」霧彦

「な…なんでだろう、凄いゾクゾクする…」フランドール  
「感じる…感じるぞ…！すぐそばに…奴の<sup>メイド</sup>気配が…！」慧音

「…この威圧感…一体…！？」妹紅

「ゆゆゆ幽々子様帰りましょう、帰りましょうよ、もう現世なんてコリゴリですよ！」妖夢

「あら妖夢、今、ゆ、って何回言ったかしら？」幽々子

「この恐怖感…まさか…霊夢さんでも近くに…」文

「…ハッ！ね、寝て無いですよ！？ねてませ…zzz…」椛

「…zzz…ろ、六本木！」空

落ち着け、最後の二人以外落ち着け、動物は規則通りの生活しか出来ませんからねえ…

「…ああ、もう落ち着いて…これはドーパントの仕業で…」

「そ…なのか…？」

！？

即座に地面に青い泥のような物が溢れ出し、中から絶対的な闇の持ち主…テラー…いや、目が真っ青になったルーミア君が現れる…

犯人は…奴か！

なら、解決したも同然だ

「…ルーミア君、そのメモリを此方に渡しなさい」

「メモリトはあるのか…？」

「鍋しましょう、鍋」

「わはー」

よし、後は取るだけ…テラーフィールドは収まっている、一応ウェザーに変身し、近づく…

「さあ、渡してください」

「分かった…とでも言うത്？」

直後、テラーフィールドが広がり、私は飲み込まれる、即座に恐怖感が増加し、心臓がショックで止まりそうになる

「…！？」

「悪いけど、何時もほど呆けてはいないわよ、テラーを使っているから」

まさか…！？テラーのメモリを使用した事で…お札の封印が弱まったのか…？

まあ、どうせ死なないので…別に怖くないですけど…？  
全くテラーフィールドの効果が無くなった…

そうか…！！

私は、絶対に死なない…！死への恐怖が消滅！私に死以外の恐怖は無い！恐怖の増幅も無いため、ノーダメージ

…

あれ？案外テラーって弱…

ってか、この世界では弱…

テラー要らなくね！？

ウェザーのが強…

「テラーのメモリ…さようなら、私の青春」

直後にルーミア君の胸倉を掴み、マウントポジションを取り、殴り続ける

「ちょ、痛っ痛いつて！や、やめろお！！」

「私はっ！貴女がメモリを排出するまでっ！殴るのをっ！やめないっ！！」

…この後、ルーミア君からテラーのメモリを奪い、

妹紅君に何回も謝り、何とか和解して…

とりあえず、安心して眠れるだけの状況を作りました…

ああ、やっぱりなれない事はするものじゃない、…明日からもガイアメモリの研究に没頭しよう、そうしよう

## 百物語2（後書き）

なんか変なの来たー！

ああ、このチクチクがたまらないっ！！

…井坂先生、私の思った通りの人…

空を打ち抜くQ／令、絶望の中で（前書き）

ちよ、ジュエルさん、かなりチートな能力っすね…井坂先生が欲しがりそう…

『特色／力：ダイヤモンドの身体故の比類なき防御能力。人間を宝石化。ダイヤモンドミストによる鏡像生成能力』

それに、なんかゼットンファイナルビーム的な事もやってみましたし…何コイツ、ゼットン？ゼットンですか？唯一ウルトラマンを倒したゼットン？

ってか、特撮物って基本的にカウンター系の能力が強いですよ



## 空を打ち抜くQ／今、絶望の中で

幻想郷、そこには多くの妖怪、神、妖精：など色々と人外が住み付いている

その所為もあつてか、妖怪に全く恐れを抱かない人類が増えた、というより、無害な妖怪は人類と殆ど同じ、という考えが普通になつて来ているのだ

一見友好的なようにも見えるが：これは一部の妖怪にはストレスの原因になつている

妖怪の中には人を驚かせる事に生き甲斐を感じる妖怪もいる訳で：人が驚かないとどうやって驚かせるか考える、結局は投げ槍になつて：暴力に至る

最近までは驚かせるだけで無害だった妖怪も凶暴化し始めている、

おお怖い怖い

からかさお化けの多々良小傘もその内の一人だ

この間なんて、驚かせようとしたら逆に襲われたなんて事もあつた（ちなみに、その男性は傘で殴られ井坂医院に運送された）

尚、この男性は

『あいつが悪い！妖怪の癖にオッドアイで素足で下駄でいきなり後ろからうらめしやゝとか言われたら堪らないって！！何：？馬鹿馬鹿しいだと：！！？お前に！お前に何が分かるんだ！？あいつはな：！小傘はな：！俺の母親になつてくれるかも知れない女なんだよ！』

と言う言葉を残し、井坂医院を去つて行つた：

まあ、それはどうでもいい話だろう、尚、男の名前は：草加まs：ゲフンゲフン

「絶望した！全く驚かない人間達に絶望したあーッ！！」

傘を振り回しながら半泣きで叫ぶ妖怪が居た、上記の小傘だ

「…もう、人間じゃなくて兎とか、もつと低レベルな奴ら驚かそうかな…」

怒りのあまり思考回路の低下が進んでいる

「…？そうか…私には…人に話を聞けるといふ利点がある…何が怖いか聞けば…あるいは…！」

良い様に利用されそうな妖怪である

そこで、彼女はとりあえず片っ端から人間に声を掛ける事にした、まず最初に…最近怖がられている妖怪についてだ

『え？最近怖がられている妖怪…？そうだねえ…やっぱり『化け鳥』かな…なんでも、樹齢が結構ありそうな大木ほどもある首を持つていて、翼はお天道様を包みこむほど大きいらしいよ？』

10人中8人がこう答えた…

で、小傘はこの事に興味を持ったので見かけられる場所を聞いたすると…

『何でも…博麗神社から見えるらしいよ、ちょうど、お天道様が一番高く上がる時間にお天道様に重なるように…』

彼女は立ち上がる、自分の威厳を取り戻すために…

「私はもう小傘ではない…エリート小傘だ！」

その台詞が堂々と言える日まで…

頑張れ小傘！

諦めるな小傘！

君の戦いは此処からだ！

（井坂）

「化け鳥？」

「そうですね、なんか天人の人達がですねえ、暴走した大天狗だ、つていちゃもん付けて来るんですよ、なんでも、天界の周りを飛びまわつては、ちよくちよく攻撃を仕掛けているらしくて…」

…大型で鳥型で、強力な妖怪…

相当な樹齢の大木ほどもある首：

明らかにケツアルコアトルスですよねえ：

…しかし、私が試験体を観察した時は…そこまでの力は無かったはずですけどねえ…

天人、というのも妖怪でしょうし…普通に撃退できるはずなんですけど…

…あ、でも…空君は不正アクセスでしたね、彼女のコネクタはアイムド専用でした…

つまり、ケツアルコアトルスの正式適合者…

…ってか、空君、非売品って言ってましたねえ……そうか…

正式適合者は空君に最初、ケツアルコアトルスを渡し、効果を見たそして、効果が分かり、自分に使用した…という事が…

一体…誰が…？まあ、いいです…ケツアルコアトルス、あれさえ手に入れば私は飛行能力を身に付ける…

全員飛んでいるのに一人だけ走るなんて事は無くなる…！！  
よっしゃ、何故か楽しくなってきましたねえ

「井坂先生？何処に？」

「少し…バードウォッチングに…ね？」

私は気合を入れ、ドアを開ける

「お賽銭、来て無いわよ」

借金（厳密には違うが）取りが居た…というより霊夢君

「ええ…今、凄い盛り上がったのに…ああ、もう…文君が持つてますから、文君から渡してもらってください…今月は25万と8千です…」

霊夢君……ね？……空気読みましょうよ…？

空を打ち抜くQ／今、絶望の中で（後書き）

空気は読むものじゃない、吸うものだ！

## 空を打ち抜くQ／アダムと井坂（前書き）

私は帰ってきたぞおおーッ！！！！

あ、後、今回の話、内容が異常に薄いですが：

久しぶりすぎてどういう構成の話か忘れてしまったんですよ、申し訳無い

お詫びにこの話には次の話のメインとなるアダムの解説を加え、連続で次の話を更新します

## 空を打ち抜くQ／アダムと井坂

ええと、落ち着いて聞いてほしい…

うん、来たんですよ…博麗神社

んで、ケツアルコアトルスのメモリを持った空君を見つけた訳で…

「何やってるんですか…」

「うわっ！井坂先生か…」

「まさか君が犯人だったとは…事情を話してください」

「え…あーいや、なんか…ファーストプランのU・03が…ケツアルコアトルスを拾ってですね…」

「あ、アダムか…」

見分けが付かない…紛らわしい

「それで…誰か適応できる人物は居ないかと…探してるんですよ」

「それで、誰も制御できず、暴れまわると…」

「そうです」

「よし、こっちにメモリを渡そうか」

素直に渡すとは…

「あ、はい、神の命令は絶対です」

思っていましたよ、最初から

「え…ええ？いいんですか…それで…」

「いいんですよ、これで…」

直後にアダムは飛び立って帰って行く…

え？…

何これ…

スッキリしな…

ええ…？

アダムの詳しい設定

U - 01 ～ U - 03 までがファーストプランと呼ばれており、  
U - 01 は十六夜咲夜から時を操る程度の能力をラーニングし、ア  
ダム達の樂園、ラブチャーを作るだけの機械と化した

U - 02 は自己発展型で「適切な処置を取る程度の能力」を手に入  
れ、ラブチャーの政治を行っている

U - 03 はナズーリンから探し物を探し当てる程度の能力をラーニ  
ングし、ちよくちよくメモリを拾っている

U - 04 ～ U - 020 はオリジナルと呼ばれ、霊を媒体とし、永遠  
の命を手に入れている

U - 20 は彼女達が独自に開発を進めた結果、辿り着いた子孫を  
増やす方法の結果である

数々の薬物とオリジナルの単細胞を媒体として作成されたため、平  
均寿命は500年程と言われている

ちなみに老化現象は起こらず、基本的に寝たら死んだ、という感じ  
である

更に、彼女達は全員が姉妹であり、彼女であるために、一人にでも  
牙を向いた相手には全員で掛かる

一人に石を投げられたら二人で投げ、の考えである。が、排他的で  
はなく、むしろ交流を盛んに行うタイプである。時折妖怪の山など  
に挨拶をして、提供を結ぼうとしているが、山の神が反論している  
神からすれば、クローンというのは禁断の区域なのだろう

尚、ファーストプラン、オリジナルは霊鳥路空と同じように「核融  
合を操る程度の能力」である

しかしセカンド（U - 20）は若干能力が低下しており「核を探  
知する程度の能力」へと変化している

だが、その代わり飛行訓練を受けており、かなりの回避力を持つ  
一種のスポーツとして、発展した

空中で行うラグビーのようなものが流行っている  
ザナルカンドエイブスとかは関係無い

ちなみに、年中開放しており、一部の人間にラブチャ―は人気のスポットとなっている

同じ顔が沢山ある事に慣れれば未知の科学力に触れられるからである（無重力部屋など）

しかし、科学を目的に来た者は門前払いである、楽しむ為に来た人間などは無料で招待する

料理も上手らしい

たまに彼女達に恋心を抱く者が居るが…

結ばれたケースは無い

というより、彼女達は大きな家族の中で育ってしまったために、愛、  
といつても「家族愛」しかなく、性的欲求などは完璧に無くなっている

無理にでもやろうとすれば、消される

その程度なのである、彼女達は



## 空を打ち抜くQ／アダムと井坂（後書き）

ちよ、本編何行だよ…

と、思った方は…

前回と続いていて、前回と一セットで一話と考えてください  
お願いします…

Aの気まぐれ／哀れな哀れな巫女さん（前書き）

さーさんって、こんな感じだと思っんだ…  
涙が止まらない

## Aの気まぐれ／哀れな哀れな巫女さん

俺は、いや、俺達は本当に存在しているのだろうか？

別に誕生の瞬間に感激が起こるわけでもなく

ボタン一つで次々に量産されていく

寿命は五百年、最初の二十年は楽しいが、その後も続く楽しみを見  
つけられなきゃ辛い人生だ

俺は見つけられなかった

だから夜道をフラフラと歩いてるんだ

何か面白い物でもないかな？と歩いてたら…

全く面白くない物を見つけた

首に縄を掛け、今にも自殺しようとしている人間だ

俺はああいうのを見るたびに思う、馬鹿だと

多くて百年しか生きられないのに、なぜ楽しむ事ができないのだ、と  
それしかない人生に何故飽きるのか

馬鹿馬鹿しい

「おい、お前！何やってんだ！」

俺は即座に飛び立ち、人間を縄から遠ざける

顔は…かなりいい方だ、可愛い

姿は、腋部分が無い巫女服で、

白と青色

髪は緑色で、左側に白い蛇のような物で纏めてる

関わったら不味いタイプだったか…！

こういう奇抜な外見の奴は妖怪か神か、どちらにしろ人外だ

「えー…あー…うん、早まるな、話を聞いてやるから」

しかも彼女、目に光が全く無いし、動きもしないから…

相当だ…

うつわ、まずった

「な、話してみる、俺に、うん、向こうにさ調度いいベンチあるし

…」

少女達移動中…

…気まずい、異常に気まずい

マジで気まずい

誰か助けて、苦手なんだ、こういう空気

だって、俺達って喋らない時間が無いぐらいだからさ…

「……神社の参拝者が少なくなったのが事の始まりだったんです…」  
始まってから暗い話だし…

まあ、乗りかかった船だ…最後まで付き合うさ

「ああ、それで？」

「……色々と努力しましたが…全く成果が出ず、軽いノイローゼに掛かったんです」

…成る程、真面目な人間によくあるパターンだな…

人間には余裕が無い、寿命が短い所為か、いつでも焦っている  
だから「時は金なり」なんて言葉もできる

「…それで？それが理由じゃないんだろ？」

「……はい、そんな時にある人に言われたんです、『体売れば参拝者が増える』と」

うつわ、もうやだ、鬱一法通行じゃないか…これ…

「…で、売ったのか？」

「……はい、最初は嫌だったんですが…本当に参拝者が増えて、信仰も集まって、ありがとって言われて…」

マジで嫌だわ…こういう話苦手なんだよね…

「…でも、最近信仰が全然増えなくて…」

「…体目的の参拝者しか居なくなっただんだ…」

「それで…これ以上私が居ると神社が腐敗してしまう…」

それで、自殺に至った訳か…身勝手だな

「あはは…神に身を捧げた身なのに…体売って…何やってんだ

ろ…私ってなっ…」

…ああもう、イライラする…

「大馬鹿者、だな」

「ですよ…」

「んで、どうするんだ？これから…」

「…もう神社にも帰れませんし…」

だろうな、帰れる筈が無い

「そもそも帰る資格がありません、私には」

「じゃあいい、しばらく俺んちで過ごせ」

「えっ…？」

「んで、落ち着いたのと覚悟が出来たら帰れ」

「でも…」

「あー！グジグジうつさいなあ！来い！」

そういつて俺は彼女の腕を掴んで無理矢理家まで連れて行く

まあ、同性同士だし、問題なしでしょ

少女達移動中…

「ほら、ここが俺の家だ」

といつても、寮みたいな物だけだな…

「…ラブチャーの人だったんですか」

「……あ、何処かで見た事あると思つたら…山の神社の巫女か！」  
いまさら気が付いた…

まあいいか、乗り込みすぎた船だ、最後まで付いていくさ

「まあいいや、ここが俺の部屋だ、とりあえず入れよ」

「おいおい！U-753が部屋に女を連れ込んだぞ！」

「マジか！遂に恋愛感情を持った奴が現れたのか…」

「うるっせーよ！お前等！寝ろ！」

まあ、確かに奇行だろうな、こんな事…

「お邪魔します…」

彼女も大分落ち着いたようで、割と軽い足取りで部屋に入る

まあ、部屋と行っても、テーブルと椅子が置いてあり、風呂場が続く扉と、キッチンがあるだけだが…

「意外と綺麗なんですね…」

「なんだそれは、まるで俺が部屋を汚くしているとも思っていたような台詞だな…」

「いや…だって…男口調ですし…」

「ああ、これか、これは気にしないでくれ、俺達、アダムって種族にはこの口調しか広められてないんだ…よければ女言葉というのを教えてくれ…」

「ええとですね、なるべく濁音を語尾に付けないとそれっぽいです」

「こ…こんな感じか？」

「あ、あと「か」も付けないほうが…付けるなら、更に次に「な」

も付けるといい感じですよ、又はこんな感じ、の「ん」を「う」に変えてそこで終わらせてもそれっぽいですよ」

手厳しい、超手厳しい

「こ…こんな感じかな…？」

「あ、そんな感じです、可愛いですよ」

ちよ…口調変えただけで可愛いって…

照れるじゃないか…

じゃなくて、照れるじゃない…か

こりゃ、面白い物を見つけたかも…

「なあ」

「ねえ、と言って下さい」

本当に手厳しいっ！

「ねえ、…しれないな、とかの場合どうすれば…？」

「な、を「わね」に変えるとそれっぽいですよ」

「ありがとう、参考になる…」

「なる、の後に「わ」か「よ」を付けるとそれっぽいですよ、わ、だと若干大人っぽく、よ、だと若干子供っぽいイメージですよ」

コイツ、本当にさっきまで自殺を考えてた人か？

…ん、この場合どうすれば…

「ねえ、人か？、見たいな場合はどうすれば…？」

「か、を「なの」に変えればそれっぽいです」

成る程…いい勉強になるわね

んん、大分馴染んできたわね…後で広めようか…

…これもおかしいな…

「広めようか、とかいう場合は？」

「か、の後に「しら」と付けるとそれっぽいですよ」

「ありがとう、本当に勉強になるわ…」

明日広めよう、大革命ね、これは…

Aの気まぐれ／哀れな哀れな巫女さん（後書き）

あれ…？あ、読む小説間違えてませんよ、ハイ、あってます  
ただ、私の中で、アダムメイン話を作ろう、という事が決定したの  
で…

ご安心を、次の次からは井坂先生の再臨です  
申し訳ありません、このようなゴミ小説で  
読者様！お許してください！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0453m/>

---

東方変態医者

2010年10月11日03時18分発行